論　説

その作品に見る良寛の生

笹　倉　秀　夫

1　問題提起
2　人間味
3　無一物と孤独・不安
4　社会との関わり
5　行禅・求道
6　悟境の射程
7　結び

1　問題提起

（1）「良寛」と聞くと、村の子供たちと夢心に遊ぶ好々爺の乞食僧をイメージするだろう。

子供らと　手毬つきつつ　霞立つ　永き春日を　暮らしつるかも　(651)[1]
霞立　永き春日に　子どもらと　遊ぶ春日は　楽しくあるかな　(112)
霞立つ　永き春日に　飯乞うと　里にい行けば　里子供　今は春べと　うち群れて　み寺の門に　手毬つく　飯は乞はずて　そが中に　うちもまぢりぬ

＊本稿は、「「童心のお坊様」の真像――谷川敏朗校注『校注 良寛全詩集〈新装版〉』の紹介」（『法学セミナー』2014年10月号）を大幅に押し広げた改訂版である。

（1）　以下、和歌については谷川敏朗校注『校注　良寛全歌集』（春秋社、1996年）の和歌の番号を記す。

その中に　一二三四五六七　汝は歌ひ　我はつき　我は歌ひ　汝はつき　つきて歌ひて　霞立つ永き春日を　暮らしつるかも　　子供らと　手まりつきつつ　此の里に　遊ぶ春日は　暮れずともよし　（65）

鉢の子に　菫たむぽぽ　こき混ぜて　三世のほとけに　奉りてな　（651）

飯乞ふと　わが来しかども　春の野に　菫摘みつつ　時を経にけり　（562）

といった歌から浮き上がる姿だ。

良寛と親交のあった解良叔問（けらしゅくもん）の子で、良寛より52歳年下の解良栄重（よしししげ）が書いた『良寛禅師奇話』には、子供たちと夢中になって遊ぶ良寛の姿、かれの人間味や純粋さが、その奇行とともに記録されている（それらのどれが事実だったかについては別途検討を要するが）。たとえば、良寛は、「手マリヲツキ[(2)]、ハジキヲシ、若菜ヲ摘ミ、里ノ子供トトモニ群レテ遊」んだのだが、その子供たちとの遊びの中では、次のような光景が目撃されてい

（2）　子供との遊びのうちでとりわけ有名な「毬突き」には、特別に禅的意味があったか。確かに、たとえば後述する貞心尼の『蓮の露』には、次のような贈答歌が記録されている：

師常に手毬をもて遊び玉ふとききて

これぞ此のほとけのみちにあそびつつつくやつきせぬみのりなるらむ　貞心尼

御かへし

つきて見よひふみよいむなやここのとをとをとをさめて又始まるを　師

（『良寛全集』大島清作編、岩波書店、1929、286頁）。

一二三…と何度も手毬突きをくり返すその動作は、すべてをそれに集中させる只管打坐・心身脱落の姿勢につながっているのである。良寛自身、

袖裏繍毬直千金

謂言好手無等匹

可中意旨若相問

一二三四五六七　（58）

と詠んでいる。したがって禅的意味は、否定できない。だが、①それが良寛と子供との毬突き遊びの一側面に過ぎず、良寛はまた、遊び自体を楽しんでいたのではないか、②良寛と子供との遊びには本文にあるように多様な形態があったのであって、毬突きはそれらの一つに過ぎないのだから、かれの禅の実践が遊びについてはどこまで及んだのかは、別途問われなければならない。筆者としては、禅的解釈は後付けであり、われわれは良寛の遊びに子供好きの温かさ、素直さを見てよいと思う（なお注41・42も参照）。

る。

「地蔵堂ノ駅ヲ過レバ、児輩必ズ相追随シテ、良寛サマ一貫ト云フ。師ハ驚キテ後口ヘソル。又二貫ト云ヘバ、又ソル。二貫三貫ト其数ヲ増シテ云ヘバ、師ハヤヤソリ反リテ、後口ヘ倒レントス。児輩コレヲ見テ喜ビ笑フ。〔…〕是ハ一年、人ノ物ヲセリ売リスルヲ、師ガ立チヨリテ見ル。声高ク其ノ値ヲ云フ。師ハオドロキテ反リカヘル。尓後コノ戯ヲナスト云フ。」

次のような記録もある。

「師ノ至ル里毎ニ、児輩多ク群ヲナシテ戯ヲナス。何レノ里ニヤ、師ハ児童トアソビ、能ク死者ノ体ヲナシ路傍ニフス。児童或ハ草ヲ掩ヒ、木ノ葉ヲ覆テ葬リノ体ヲナシテ笑ヒタノシム。後ニ狡猾ノ児アリ、師ガ死者ノ体ヲナセバ、手ヲ以テ鼻ヲツマム。師モ久シキニ堪ズシテ蘇生スト。」

良寛の親戚で与板の名家山田家の当主杜皐（とこう）も、

はつとれの　鰯のやうな　良法師　やれ来たといふ　子等が声々

と、良寛と子供たちとの交りを詠っている。

良寛はまた、自然の中での清貧な隠遁生活の充足感・静寂の美を、われわれに教えてくれる。

草の庵に　足さしのべて　お山田の　かはずの声を　聞かくしよしも（1240）
（「草の庵に　足さしのべて　小山田の　山田のかはづ　聞くが楽しさ」ともある）
わが宿の　竹の林を　うち越して　吹きくる風の　をとの清さよ　（212）
わが宿の　軒ばの峯を　見わたせば　霞に散れる　山桜かな　（129）
あしびきの　国上（くがみ）の山の　時鳥　今を盛りと　ふりはへて鳴く　（189）
夜もすがら　寝覚めて聞ば　雁がねの　天津雲井を　鳴き渡るかな　（234）
草の庵に　寝ざめて聞けば　あしびきの　岩根に落つる　滝つ瀬のをと（355）

つれづれと　眺め暮らしぬ　古寺の　軒端を伝ふ　雨を聞きつつ　（416）

といった一連の和歌が、それを語っている。

良寛の人間味はまた、かれが70歳の時に30歳の美しい尼、貞心尼に出会い、かれが死去するまでのその後の 4 年間、師弟の深い心の交りを続けた有名なエピソードからも確認できる。

良寛の短歌、俳句、墨跡は、このような人柄・その生の表出物である。これがその時代以降、文人たち、とりわけ明治以来の知識人の癒しとなり、幸せとは何か・豊かさとは何かを人びとに考えさせてきた。

（2）　しかしわれわれは、良寛の伝記をひもとくとき、その人生において次々と不幸がかれに襲いかかっていたことに（後述のようにかれが近隣農村の人びとの多くの不幸・貧困を目撃し心を寄せていたこととともに）、印象づけられずにはおられない。

新しい良寛研究の成果[3]をも踏まえつつまとめると、生家橘屋（山本家）[4]は、すでに良寛が生まれる頃、次のような情況下にあった：橘屋には跡取りがなかったので、のちに良寛の母となるおのぶ（旧説では「秀」ないし「秀子」）を佐渡・相川の橘屋（出雲崎橘屋の分家筋）から養女にとった。やがて彼女は、のちに良寛の父となる新次郎（新津の大庄屋桂家の非嫡出子）と婿入り結婚をし、 3 年後に良寛（幼名は栄蔵）を出産する。しかしこの新次郎は、桂家の跡取りである兄が出家してしまったため実家に呼び戻さ

（3）　磯部欣三『良寛の母おのぶ』（恒文社、1986）。田中圭一『良寛の実像』（ゾーオン社、1994；刀水書房、2013）。

（4）　橘屋は、出雲崎一の名門で、名主、神主を歴任するとともに、廻船問屋を営み、また佐渡からの金・銀の荷揚げを一手に引き受けていた（出雲崎は佐渡渡航の要所で、金の陸揚げ港として栄えてきた）。橘屋はさらに、北国街道の宿場の本陣でもあった。このような橘屋だったが、しかしすでに良寛の生誕前後から傾きを早めていた。出雲崎は港湾が狭いうえに岩礁が多く、大型船の入港が困難であった。このため隣接する良港の村、尼瀬との競争に敗れつつあった。橘屋は、家運に陰りが濃くなっていき、ついには尼瀬の名家で廻船問屋を営んでいた京屋、および出雲崎でのライバルである（もう一人の有力者）敦賀屋に蹴落とされるかたちで瓦解してしまう。

れる。良寛の実父母はこのようなかたちで、かれの生誕後まもなく離婚させられたのだった。

その後おのぶは、与板の新木重内（以南。旧説では、かれが良寛の実父とされた）と婿入りの再婚をする(5)。良寛自身はというと、結婚したが半年で

（5） 上記のように新説では、良寛の実父は新次郎であって、以南は良寛の継父であったとされる。しかし、良寛の作品からは、以南が実父であり由之（ゆうし）以下の弟妹が実の弟妹であったと考えるのが素直な読み方である、との印象を筆者はどうしても受ける。たとえば、円通寺での修行時代初期の作とされる、次の長歌がそうである。

うつせみは　常なきものと　村肝の　心に思（も）ひて　家を出で　親族（うから）を離れ　浮雲の　空のまにまに　行水（ゆくみず）の　行方も知らず　草枕　旅行く時に　たらちねの　母に別れを　告げたれば　今は此世の　名残とや　思ひましけむ　涙ぐみ　手に手をとりて　我面を　つくづくと見し　面影は　猶目の前に　あるごとし　父にいとまを　請ひければ　父が語らく　世を捨てし　捨てがひなしと　世の人に　言はるるな努と　言ひしこと　今も聞くごと　思ほえぬ　母が心の　睦まじき　其の睦まじき　み心を　はふらすまじと　思ひつど　常哀れみの　心持し　うき世の人に　向かひつれ　父が言葉のいつ　くしき　このいつくしき　み言葉を　思ひ出でては　束の間も　法の教へを　くささじと　朝な夕なに　　戒めつ　これの二つを　父母が　形見となさむ　我が命　此世の中に　あらむ限りは　(45)

ここの「父」は、以南である。良寛はそのやさしい励ましの言葉を心に深く刻み、修行の励みとしたのである。たとえ以南が継父であったとしても、この長歌の限りでは、実母に対してと変わらぬ心の通いが「父」にも感じられる。

他にも、「父の書けるものを見て」と題した和歌、

みづくきの　跡もなみだに　かすみけり　ありし昔の　ことを思へば（1267）

は、以南の自筆の句「朝露に　一段ひくし　合歓の花」に書き添えた歌で、「父」とともに暮らした若き日々を思い出して涙する良寛の姿には、しみじみとした親子の情が感じられる。良寛はこの短冊を生涯手元に置いていた。

極楽に　わが父母は　おはすらむ　けふ膝もとへ　行くと思へば　(1306)

でも、「父」は実母と並ぶ、心の人である。

加えて、良寛の感覚の繊細さ、作品の高貴な雰囲気も、以南の俳句のそれと通底しているように思える。以南の俳句とは、

淡雪に　杉の実まじる　雫かな
冬の月　竹よりすべり　落ちぬべし
雲間から　星もこぼれて　時雨哉
水仙花　さはれば玉の　ひびきあり
朝露に　一段ひくし　合歓の花

離婚を体験し、また以南への反発もあって[6]18歳頃に突如、名主の地位を（以南とおのぶとの実子）由之に譲って出奔し、まもなく出家する。

良寛が26歳の時に、母おのぶが49歳で病死した。良寛は、岡山県玉島にある円通寺で修行中だったので、死に目に会えなかった。37歳の時には、以南が遍歴の後、京の桂川で入水する旨の手紙を残して行方不明となってしまった（享年60歳。出家して高野山に入ったとも言われる）。良寛41歳の時には末弟の香（澹齋）が、同じ京の桂川で入水した（病死説もある。享年32歳）。2 年後には、もう一人の弟宥澄が病死している（享年31歳）。そして良寛53歳の時に、弟由之は、出雲崎町民から代官所に、上納金を私物化したとして訴えられた。由之は敗訴し、財産没収の上、所払いとなった。橘屋は瓦解となり、実家の人びとも離散してしまう。由之は自暴自棄となって「大酒飽淫」の乱れた生活に陥ってしまった[7]。

良寛の実家に限っても、このように悲劇が相次いだのだった。神経が極端に細い良寛だった。しかも以南・由之の破滅には、かれの出奔が確実にその原因の一端を成していたのである。

（3）　かれの作品、とくに500近い漢詩[8]には、良寛の好々爺ぶりや「吾

そこふむな　ゆうべ蛍の　ゐたあたり

といったものである。

（6）　以南は、すぐれた俳人・文人であったが、出雲崎の人びとからは、その激しやすい気性のゆえに嫌われていた。以南は、1775年 7 月11日に、出雲崎町の名主見習役となった良寛を立ち会わせたうえで、節句祝儀の件で敦賀屋のまだ若い主人・富取長兵衛を激しく叱責した。長兵衛は、三峰館で良寛のきわめて親しい学友だった。その 1 週間後の 7 月18日早朝、18歳の良寛は突如、家禄を弟の由之に譲るとの書置きを残して家を出てしまった。

（7）　良寛は、由之の傷心ゆえのこの放蕩ぶりに心を痛め、「[そのような生活を] ゆめゆめすごさぬよふに　あそばさるべく候」と諫める手紙を送っている。谷川敏朗校注『良寛の書簡集』（恒文社、1988）11頁。

（8）　谷川敏朗校注『良寛全詩集』（春秋社、1998。新装版、2014）。以下、漢詩については同書の詩番号を記す。良寛は詩論として、詩の形式やアイデアを尽くしても、「不写心中物　雖多復何為」（206）だと論じている。自分が深く考えること・感じることを込めて詠ってこそ、詩歌となると言うのである。実際かれの詩歌には、そうした自己の深い感慨や思索が鮮明に出ている。

唯知足」のイメージにはそぐわない、多様な心の動きが表されている。それらには――四季の美や心の静かな動きとともに――独り暮らしで病気がちである老いの身の孤独と不安（たとえば、詩番号18・105・132・137・334）、多くの別離、それにともなう強い無常感などが主題化されているし、1828年の三条大地震（351・352）、干魃・台風（2）、冷害・信濃川の大氾濫（103）などの天災、農民の貧困（260）、うち続く農民一揆（69）、退廃した世相の批判・仏教界や文芸界の批判（102・133・261）などが記録されているし、さらには冬の草堂で病ゆえに動けず飢餓の危険にさらされていたこと（307）なども描かれている[9]。直腸ガンに苦しんだ晩年まで続く座禅の実践（310・335・336・347・424・425）、厳しい自省（68・94・315・333）、道元に対する敬慕・燃える求道心（317・318）も、際立っている。

（4）　自身が悲劇に次々と見舞われ、また世の悲惨さをも多く体験し、孤独を愛しつつもその孤独に苦しみ、加えて、自分に対する厳しい姿勢・一途な求道心をもち、同時代の仏教界を激しく批判する人が、他方では人びとや自然美を愛する温かい愛の人で、かついろいろ奇行・風狂をも見せた。かれのこうした多元性は、どういう構造を成していたのだろうか。

相馬御風は、この点に迫った最初の人である。その著『大愚良寛』（1918）[10]における御風の結論は、次の通りである：良寛は表面においては「魯鈍疎懶」・「「昂昂乎として囚はれなかった」自由の人」であったが、「内部的にはむしろ痛ましいまでに敏感な神経の顫動を感じて居た人」（59頁）・「悩める人」だった[11]。良寛は、そうした自分の現実を正視して絶望す

（9）　良寛の和歌にも、天然痘の流行や旱害の悲惨、犠牲者への同情、無常感が詠われている。しかし、和歌や俳句では、その形式からして思想を展開するのは難しい。かれの和歌は、品格が有り、淡泊・平易・自然体であり、かつやさしさに溢れている点で、かれの体質をよく物語っているのではあるが。前掲注2・谷川敏朗校注『良寛全歌集』452頁以下。

（10）　相馬御風『大愚良寛』（1918、増刷第2版、考古堂書店、2006）58頁以下および他の頁。

（11）　御風が、①良寛はその前期においては「悲痛哀傷」の人であり自分の悩み・内なる矛盾・不徹底さに苦しめられたが、後年それを脱却したと見ているのか、それ

るという、「あらゆるものに対して空観をいだくより外に仕方なき境地まで行った」（同上206頁）。そしてこのゼロの地点から再出発し、その「強き生の愛着」（91頁）をエネルギーにして、一歩一歩進んでいった。こうして良寛は、「弱きに徹して強くなる道を選」ぶことによって、自由な人となりえた、と。

御風は、失意のうちに34歳で都落ちし人生問題で煩悶している自分を良寛や一茶に重ね、この「弱きに徹して強くなる」ことに自己救済の道を見出したのだった。だが当の良寛自身はと言えば、記録が残っている、帰郷の前の時期以降そうだが、時には自分の不完全さ・孤独・先の不安を詠うこともあったし、亡き親族や友を思い出して涙することはあったが、しかしそれらゆえに自分に失望したりつぶれたりしたわけではない。時には天変地異・人びとの困窮を嘆き、沈んでしまって空観・諦観を詠うこともあったが、しかしそれらによって心を乱され尽くしてしまうことはなかった。一方で弱さをみせつつ詠う時もあったが、かれは、他方ではさっと禅境に入り、書物や書道に沈潜し、また自然の美しさ・人びととの交わりを心より楽しむのでもあった。良寛は、近代人的に自我の分裂が気になり・人生論問題に悩み・「なんとか強い自分になりたい」との意識に取り憑かれつつ生きた人ではない。

表面においてだけではなく内部的にも、また内面においてとともに行態全体においても、良寛は、感受性は強いが腹の据わった静かな強さの人であり、それゆえにおおらかで飄々としていたようである。そしてそうした良寛は、おそらく円通寺時代にはかなりできあがっており、五合庵時代に

とも、②後期においても内面と外面とで分裂があったと見ているのか、御風の議論からは明かではない。もし①であるとすれば、（前期・後期においてともに）内面と外面とでのちがいを論じる必要はないし、また後期と前期はいつ分かれるのかが問われる。もし②であるとすれば、内面には「悲痛哀傷」があるものの、良寛はそれを脱却する思考をももっていたことが明かであるから、その内面の構造を示す必要がある。筆者は、この点に関しは、良寛は後期においてもその内面に「悲痛哀傷」をもっていたが、同時にそれを相対化する強い心をももっていた、と見る。

は固まっていた。[12]

御風の『大愚良寛』は実証研究に根ざしつつ良寛の人間性・実存に迫った作品として、筆者も高く評価する。けれども良寛が――その前期において／もしくは生涯にわたり、その内面において――「悩める人」・「弱きに徹して強くなる道を選んだ」人であったかどうかは、良寛を考える際の中心問題ではないように思われる。[13]

では、この点を前提にした場合、良寛のこうした特性を支えていたのは何なのか。それは、生来の自然態なのか、意識的克己なのか、禅の修行の結果得た精神状態なのか。本稿は、良寛の生の一つひとつの重要なポイントを着実に押さえたうえで、それらから、上記の視点に関連して浮かび上がる、かれの思考構造を――膨大な量の先行業績にできるだけ多く学びつつ――考察することを課題とする。

2　人間味

冒頭に述べた良寛の人間味について、もう少し敷衍しておこう。良寛の温かさ・純粋さは、大人たちとの交わりの場で一層はっきり目撃された。

ある時、島崎の名家・木村家（のちに良寛がその屋敷の一隅で晩年を過ごすことになる）の跡取り息子が極道して勘当された。周りの人びとが父親に、勘当を解くよう説得したが、埒が明かなかった。そのときにたまたま木村家を訪れた良寛は、周りから頼み込まれて父親を説得し、最終的には勘当を取り消させることに成功した。下記の手紙は、結果をその息子に知

(12)　長谷川洋三『良寛禅師の悟境と風光』（大法輪閣、1997）第3章。御風は、良寛の「廓然無礙な風格」が円通寺時代中の第三期、34歳頃以降にはできあがっていたとしている。前掲注10・『大愚良寛』73頁以下。

(13)　ただしこの御風も後年には、良寛の芸術から浮かび上がる特徴について、「いかなるものにもとらわれずに無礙に生きた――それが良寛和尚の真面目ではなかったか」とも述べている（相馬御風『一茶と良寛と芭蕉』1925，新版、恒文堂、1997、152頁）。これは、的確な把握だと思われる。

らせながらかれをやさしく説得した手紙である（良寛は息子とも懇意であった）。息子はこの手紙に深く感動し正道に立ち返ったという。

「周蔵殿　良寛　　此度　貴様かんどうの事ニ付　あたりのものどもいろいろわびいたし候へども　なかなか承知無之候　私も参りかかり候故　ともどもにわびいたし候へバ　かんどうゆるすことに相なり候　早速御帰候而可然候　さて御帰被遊候て後ハ　ふつがうの事なきよふに御たしなみ可被成候　第一あさおき　親の心にそむかぬ事　し事も手の及だけつとめて可被遊候　其外の事も　御心づけ可被遊候　かさねていかよふな事でき候とも　わびごとハかなはず候間　さよふにおぼしめし可被成候　以上　　四月十四日　良寛」(14)

親父殿への自分の働きかけが功を奏したことが、良寛にはさぞうれしかったのだろう（実際には、父親は本気で勘当する気はなかったが後に引けず、良寛をうまく利用してよりを戻したのだそうである）。そしてそれとともに、息子とその親それぞれへの細かな心配りが読み取れる。

かれの最晩年のことであるが、ある人が激しい雪の中を使いの者を送って揮毫を依頼してきた。良寛はこれに対し、次のような書簡をしたため手渡している。

「雪の中に人を被遣候ども　近ごろは物書事すべて不出来候　筆ものこらずきれはて候　たとひ有ても　手にとらず候　何処から参り候とも　みなみな如此候　　以上　　霜月四日」(15)

使いの者の苦労に対する配慮、依頼主の切実さに対する顧慮からのことであろう、断り方に誠意があふれ出ている。揮毫を断られた人物も、このようなやさしさが込められた直筆の手紙を受け取れば、揮毫をはるかに超えた、高価なものを得たと喜んだことであろう。この時の依頼主は、長岡藩主であったと言われる。それが事実なら、「何処から参り候とも　みなみ

(14)　前掲注 7・谷川敏朗校注『良寛の書簡集』182-183頁。
(15)　前掲注 7・谷川敏朗校注『良寛の書簡集』384-385頁。

な如此候」という表現には、良寛の毅然とした、人間皆平等の姿勢を読み取ることにもなる。

村人たちは、このような良寛に親しみ、かれの全部を受け入れた。

『良寛禅師奇話』は、次の光景を伝えている、

「中元前後、郷俗通宵ヲドリヲナス、都テ狂フガ如シ。師ハ是ヲ好ム。手巾ヲ以テ頭ヲツツミ、婦人ノ状ヲナシ、衆ト共ニヲドル。人ハ師ナル事ヲ知リ、傍ニ立チテ曰ク、コノ娘子品ヨシ、誰ノ家ノ女ト。師ハ是ヲ聞キ悦ビ、人ニ誇リテ曰ク、余ヲ見テ誰ガ家ノ女ト云フト。」

かれの素直な性格、それを温かく受け入れる村人たちの姿が鮮やかだ。

良寛においては、その奇行さえほほえましい。

「師ハ曾ツテ、茶ノ湯ノ席ニ列ル事アリ。所謂濃茶也。師ガ呑ミホシテ見レバ、次客席ニアリ。口中含ム所ヲ碗ニ吐キテ与フ。其ノ人、念佛ヲ唱テ呑ミシト語ラレキ。」

次のエピソードも、同種のものである。

「同ジキ席ニヤ、鼻クソヲ取リテ、ヒソカニ坐右ニオカントス。右客袖ヲヒク。左ニオカントス。左客又袖ヲヒク。師ハ止ムコト得ズ、是ヲ鼻中ニ置シト云フ。」

国上山の草堂では良寛は、一人で次のような、これまた子供ぽい失敗をやらかしている。

「師ガ国上ノ草庵ニ在リシトキ、竹筍厠ノ中ニ生ズ。師ハ蝋燭ヲ点シ、其ノ屋根ヲヤキ、竹ノ子ヲ出サントス。延ラ厠ヲヤケリト。」

事実かどうかはともかく、その純粋さ、周りの人びとの抱擁の姿勢がほほえましい[16]。良寛は、ユーモアがあり、戯けることのうまい人でもあった。

(16)　このような良寛の姿は、次のような幼少期のエピソードと関係するのかもしれない。すなわち口碑によると、良寛はある日、父親から「親を反抗的な、上目遣い

多くの奇行は、そのまっすぐさと戯けとから解すべきものとしてあるが。

3　無一物と孤独・不安

良寛は18歳前後の出奔後、22歳のときに大忍国仙について得度し、国仙の玉島・円通寺に入山した。以後11年の間、かれは懸命に修行した。後にこの円通寺時代を回顧して良寛は、

従来円通寺
幾回経冬春
門前千家邑
乃不識一人
衣垢手自濯
食尽出城闉
曽読高僧伝
僧可可清貧　（1）

と詠んでいる。寺に籠りきりで、玉島の町には食べものがなくなったときに乞食にいくだけだったので、親しくなった人はいなかった、と。

かれは33歳の時に、国仙から印可証明を受けた。国仙はその 1 年後に死去した。良寛は、国仙が亡くなる前後から諸国への行脚を始めていたが、かれの死後、完全な行脚生活に入った。諸国遍歴をした後、良寛は38歳の頃に郷里に戻り、10年間寺泊（てらどまり）周辺の寺々を転々としながら乞食生活をした。国上山（くがみやま）の中腹にある国上寺（こくじょうじ）の住職の隠居所、五合庵には40歳の頃に入ったが、 5 年後にはいったんそこを寺に明け渡して出、47歳の頃に再入居して定住した。59歳の頃には、体が弱り始めたこともあって、山麓の乙子（おとこ）神社社務所に移り、10年間そこで暮らした。

の目でにらみつけると、ヒラメになるぞ」と叱られた。かれは、本当にヒラメになるのだと思い込み、そうなったときにはすぐに海に飛び込もうと波打ち際にじっと立っていたという。かれは幼少期以来、「昼行灯」と呼ばれてきたとも言われる。

かれは、その清貧のさっぱりした隠遁生活を、次のように詠っている：

索索五合庵
実如懸磬然
戸外杉千株
壁上偈数篇
釜中時有塵
甑裏更無烟
唯有東村叟
頻叩月下門　(34)

山深く、粗末な離れ小屋の五合庵で、乏しい独り暮らしが続いている。食べるものに事欠くことさえある。それでも、近くの村の友人が訪ねてきてくれ、美しい月が照らす山並みを一緒に見ながら楽しい時を過ごす、と。次の歌も、前向きで、かつ美しい：

少小抛筆硯
窃慕上世人
一瓶与一鉢
游方知幾春
帰来絶巘下
静卜草堂貧
聴鳥充絃歌
瞻雲為四隣
巌下有清泉
可以濯衣巾
嶺上有松柏
可以給柴薪
優游又優游
薄言永今晨　(84)

少年の頃、学者になろうとしたこともあったが、心の中では釈迦への敬いの心が強まった。そして僧侶となり幾年月、乞食行脚の暮しをした。こうして故郷に戻り、国上山の草庵で独貧で暮らしている。鳥の声が周りに溢れ、いろんな雲が訪ねてきてくれる。山の泉で衣服を洗い、山の枯れ木を薪に使う。悠々自適のこの暮らし。さあ今朝も、ゆったりした日を始めよう、と。(17)

草庵での清貧枯淡の生活とはいっても、良寛は苦行一辺倒の不自然な生き方はしなかった。むしろ生活ぶりは余裕・中身の充実を感じさせるものであった。かれは、地元の文人肌の名士たち、富豪層や医師、住職たちと親交し、しばしば歓待されまた訪問を受けた。かれの書簡集からは、良寛がそのパトロンとなってくれた裕福な知人たちから様々なものを贈られていたことが分かる。贈物の多様性(18)と、それへの喜びぶり、そうした交流から生まれた作品群の質と量からも、良寛が峻厳一途の隠者ではなく、好みも豊かな、生をエンジョイする人間味のある、柔軟思考の人だったことが分かる。

しかしながらこの隠者的生活は、孤立のゆえに、病気の時には孤独死の危険、冬期には饑餓死の危険、長雨の時期や嵐で閉じ込められた日々には抑うつ状態に陥る過酷なものだった。そうでなくとも、傷病・孤独・不安がしばしばかれを襲った。かれが永らく住んだ国上山中腹の草庵はもちろんのこと、乙子神社社務所にしても、集落を離れ孤立した小さな住まいである。越後の厳冬に、そのようなところで独り暮らしをするには、想像を

(17)　良寛のこうした隠遁志向の根底に有るものとして、石田吉貞『良寛』（塙書房、1975）は曹洞宗の万元恵海の影響を強調し、川内芳夫『良寛と荘子』（考古堂、2002）281頁以下は荘子の思想的影響を強調する。

(18)　良寛が友人たちから贈られた物としては、酒、煙草、米餅、百合根、砂糖、さらには鮒やお金などがあった。このうちの酒については、友人の半僧に宛てた手紙に、「先日海松（みる）たまわり、久々にて賞味致、其日ハ不覚大酔仕候　以上」とある（前掲注 7・谷川敏朗『良寛の書簡集』347・348頁）。友人宅ではもちろんのこと、草庵でも、独り酒を楽しみ酩酊することもあったのだ。

絶する困難があっただろう。

実際、乙子神社期での厳冬期、食糧が尽きて思案のあげく手紙を託して知人に緊急の援助を請うという事態も起きている：

蕭条三間屋
摧残朽老身
況方玄冬節
辛苦具難陳
啜粥消寒夜
数日遅陽春
不乞斗升米
何以凌此辰
静思無活計
書詩寄故人　(307)

良寛は、托鉢で得た米を粥にして飢えを凌いできた[19]。その米も、厳しい寒さの中でもう尽きてしまった。しかしかれは、病のため立ち上がれず、里に托鉢にいけない[20]。この危機に直面して良寛は思案のあげく、上記漢詩の手紙を人に託し、知友に援助を求めたのである。「摧残朽老身」（無残に壊れていく老身）、「辛苦具難陳」（辛さがどうしようもない）に、その窮状がコンデンスされている。

寒さと空腹は、次のようなかたちでも襲った：

青天寒雁鳴
空山木葉飛
日暮烟村路

(19)　この粥のうすさは、
　　我だにも　まだ食ひ足たらぬ　白粥の　底にも見ゆる　影法師かな　(998)
と詠われている。

(20)　数多くの手紙から分かるように、良寛はたびたび風邪を引き、下痢をし、皮膚病にかかり、足をくじいて歩けなくなる等の疾病を重ねた。

独掲空盂帰　（53）

良寛は、托鉢で一日を費やしたが、何も得られず空っぽの鉢の子をささげたまま、暗くなった山道をとぼとぼ帰っている。強い寒風が、木の葉を舞い上がらせる。疲れた身体でさらに山を登り、昼も食べず夜も十分食べられないまま、ひとり寝なければならないのだ（他に、105・334）。

長期間、病で動けず食べることができなかった記録もある：

あしびきの　山田の田居に　我をれば　昨日も今日も　訪ふ人はなし　（555）

この歌は１月16日に友人宛てに託されものである。ここで良寛は、年末からこの日までの20日間を、病で動けないまま独り過ごしていたのである。

飯乞ふと　里にも出でず　なりにけり　昨日も今日も　雪の降るれば　（884）
埋み火に　足さしくべて　臥せれども　今年の寒さ　腹に通りぬ　（867）
いかにして　暮らしやすらむ　これまでは　今年の冬は　まこと困りぬ（889）

といった歌も、同様な情況下のものである。

草の庵に　立居てみても　術ぞなき　海人の刈藻の　思ひ乱れて　（549）

は、雪ないし雨に閉ざされた時の歌だろう。狭小な草庵の中に閉じ込められた日々がいつ果てるともなく続けば、誰でも一種の閉所恐怖症に襲われる。ましてや人との連絡も途絶え、しかも激しい吹雪、深い雪ないし豪雨に閉じ込められた暗い毎日では、不安と孤独でどうしようもない気持ちが出てきて、立ったり座ったり、じっとしておられなくなるのだ。

今よりは　古里人の　音もあらじ　峰にも尾にも　雪の積もれば　（360）
わが宿は、越の白山　冬ごもり行き来の人の　跡かたもなし　（546）
わが庵は　国上山もと　冬設けて　日にけにみ雪の　降るなべに　ふるさと人の　をともなし　行き来の道の　跡もなし　浮き世をここに　門さして

飛騨の工が　うつなはの　ただ一すじの　岩清水　そを命にて　あらたまの
今年の今日も　暮らしつるかも　（576）

とあるように美しい雪景色の中ではあるが、その隠遁の生活は命を懸けた孤立状態下でのものだったのだ。

悟りを得て腹が据わり強い意志力をもった良寛ではあった。しかし雨が降り続く暗い日や、身を刺す寒さ、深雪の日には、孤独感と、自分の末路を考えての不安が、かれを襲った：

六十有余多病僧
家占社頭隔人姻
巌根欲穿深夜雨
燈火明滅孤窓前　（334）

60歳を越えてしまった自分は、病気がちの僧である。住んでいるのは、乙子神社境内の草庵、国上山住いの頃よりは集落に近づいたが、それでも人家から離れた杜の中だ。人がわざわざ訪ねてくれるのは、まれのこと。この先、病気や怪我、さらには老いによって、歩くこともままならなくなったら、自分はどうなるのか。今夜の雨は、磐の根をも穿つほどに激しい。孤立したこの草庵の窓辺で、灯りが心細く明滅する、と。しきりにゆらぎ今にも消えそうな灯火は、良寛の弱々しい、老いた命を象徴しているかのようである。

同じ乙子神社期には、次のようにもある：

四大方不安
尽日倚枕衾
竹偃積雨後
牆頽碧蘿陰
幽径人跡絶
空階蘚華深

寂蓼有如箇
何以慰我心　（253）

梅雨の鬱陶しい時期に、良寛は草庵で病気になった。起き上がることができない。神社の杜の深い竹藪は雨で重くなってうなだれ、朽ちた垣根は生い茂ったかずらに被われてしまった。こんな日だ、この杜に足を運んでくれる人は期待できない。濡れた苔が、花をいっぱいに咲かせている。寂しいこのような日を、わたしは何によって心を充たせばよいのか、と。老いた独り暮らしの身で病むことの苦しさと不安、それによってますます募る孤独感が、梅雨の中の暗いじめじめ感と重なって詠われている。

昏夢易驚老朽質
燈火明滅夜過央
撫枕静聞芭蕉雨
与誰共語此時情　（250）

人は老いると、眠りが浅くなる。良寛は今夜も、夢に驚いて夜半過ぎに目覚めてしまった。もう一度寝ることができない。ゆらゆら消えそうな灯火のもと、枕によったまま芭蕉を叩く雨音を聞いている。この寂しさを語り合う人もいない。ここでも、今にも消えそうな灯火が、かれの心を象徴してゆらいでいる。

この頃の和歌にも、「老い」や「病い」・「朽ち」が次のように詠われている。

をつつにも　夢にも人の　待たなくに　訪ひ来るものは　老にぞありける（951）
国上の　山の麓の　おと宮の　森の木下に　庵して　朝な夕なに　岩が根の　こごしき道に　爪木こり　谷に下りて　水を汲み　一日一日に　日を送り送り送れば　いたづきは　身に積もれども　うつせみの　人し知らねば　はてはては　朽ちやしなまし　岩木のもとに　（903）

孤独死の強まる予感がここでも、良寛の心に重くのし掛かっている。国上山の草庵でも良寛は、

和泉なる　信田が森の　葛の葉の　岩の間に　朽ち果てぬべし（492）

と詠んではいた。しかしそれでもこの歌からは、挑戦しようとする心の強さが感じられる。それがかれを支えて来たのだった。その良寛も、この乙子神社期に入って、かなり体力・気力を落としたようである。

寂しさについては、国上山草庵期の次のような詩がある。

孤峯独宿夜
雨雪思消然
玄猿響山椒
冷澗閉潺湲
窓前鐙火凝
牀頭硯氷乾
徹夜耿不寝
吹筆聊成篇　（137）

深い山中の草庵で、良寛は今夜も独りぼっちだ。雨混じりの雪に、心は沈んでしまう。遠く猿の声が、山中に響く。谷川の流れは、凍結して音を失った。窓辺の灯火は、凍てついたかのように動かない。枕元の硯の墨さえ氷結するほどの寒さに、良寛はいつまでも眠れない。そしてとうとう床を離れ、凍ってしまった筆の先に息を吹きかけて詩を綴り始めるのだった。

世の人に　まじはる事の　憂しとみて　ひとり暮らせば　寂しかりけり　（491）

この歌でも良寛は、世捨て人として決意を固めた身に襲ってくる孤独感を噛みしめている。親友の阿部定珍（さだよし）に送ったこの歌は、病んで永らく里にも出られなかった時のものである。

他にも、孤独を憂いた歌は数多い。

み雪降る　片山かげの　夕ぐれは　心さへにぞ　消えぬべらなり　（392）
山里の　あはれを誰に　語らまし　稀にも人の 来ても訪はねば　（385）

托鉢からの帰りにも、良寛は寒さの中で突如、孤独感に襲われる。

秋気何蕭索
出門風梢寒
孤村烟霧裏
帰人野橋辺
老鴉聚古木
斜雁没遥天
唯有緇衣僧
立尽暮江前　（18）

托鉢で歩き回って疲れたこの身に、秋の夕暮れの寒風が容赦なく吹きつける。遠くには、夕餉の煙が被う小さな村落が見える。仕事を終えた農夫が、橋の上を家に帰っていく。老いたカラスが枯れ木で啼き、雁たちが遙かな空を落ちていく。暮れなずむこの河の畔に立っているのは、ぼろを着た独りぼっちの坊主。これから遠く、あの山の中腹まで、暗い道を登っていかねばならないのだ、と。

痴頑何日休
孤貧是生涯
日暮荒村路
復掲空盂帰　（370）

郷里に帰り着いてすぐの頃の詩と言われる。この愚かでかたくなな性格はいつになったら直るのだろうか。自分は貧しい独り身の生活を選んだ。だが、窮乏化激しい村々だ。托鉢で一日歩いたものの、また今日も空っぽの鉢の子を捧げて、自分は日暮れの道をとぼとぼ帰っている、と。

次の長歌での良寛は、雨が続く秋、寒風に襲われて寝ることもできず苦

しんでいる：

神無月　時雨の雨の　おとつひも　昨日も今日も　降るなべに　森の紅葉は　玉ぼこの　道もなきまで　散りしきぬ　夕さりくれば　さすかけて　つま木たきつ　山たづの　向かひの岡に　小牡鹿の　妻呼びたてて　鳴く声を　聞けば昔の　思ひ出に　うき世は夢と　知りながら　憂きにたへねば　さむしろに　衣片敷き　うち寝れば　板敷きの間より　あしびきの　山下風の　いと寒く吹きくるなべに　有り衣を　有りのごとごと　引かづき　こひまろびつつ　ぬば玉の　長きこの夜を　いも寝かねつも　(841)

漢詩でも、秋の夜長の独り寝の辛い様を記録している：

秋夜夜正長
軽寒侵我茵
已近耳順歳
誰憐幽独身
雨歇滴漸細
虫啼声愈頻
覚言不能寝
側枕到清晨　(118)

薄い布団に寒さがしみこんで来て、寝付けない。老いが深まっていくのに、こうして独りで暮らす身だ。これから、自分はどうなるのだろうか…。それでも、やがて雨がやんだ。軒を落ちる雨だれの音が聞こえだし、虫たちが頻りに啼きだした。それを聴きつつ、良寛は静かに心を持ち直していく。

こうした孤独な中で、良寛は自分を見つめ、その修行の足りなさを痛感する。そしてそうした暗さの中でも、小さな一歩一歩を重ねて、前に向かって進んでいこうとする：

少年捨父走他国
辛苦画虎猫不成
有人若問箇中意
只是従来栄蔵生　（315）

四十年前行脚日
辛苦画虎猫不似
如今瞼崖撒手看
只是旧時栄蔵子　（333）

これら二つの詩で良寛は、自虐的なまでに自分の今を見ている。若い時わたしは父に背いて家を飛び出した。そしてそれ以降今日まで40年間、立派な悟道者になろうと懸命に修行をしてきた。しかしその努力も、結局のところ実らなかった。年月は重ねたものの、ここにこうしているのは、幼い栄蔵のままの自分だ。「虎」になろうとの強い意欲で来たものの、結局は「猫」にしかなれなかった、と。この詩には、単に謙虚に留まらない、良寛の自分への深い失望が出ている。かれは、悠々自適、自己放下、好々爺だけの人ではけっしてない。

国上山下是僧家
麁茶淡飯供此身
終年不遇穿耳客
只見空林拾葉人　（68）

良寛はこの詩でも、厳しく自分を省みる。国上山の庵で、清貧生活を続けつつ座禅修業を重ねてきた。が結局、悟りを得られはしなかった。今ここで動いているのは、枯れ木の山で落ち葉をかき集めるただの一老人だ、と。(21)

(21)「穿耳客」を悟った人、「拾葉人」を他の説を受け売りする人とし、自分は素晴らしい禅者にまみえず、会うのは愚者ばかりだと仏教界を批判した詩だとの解釈があるが（前掲注12・長谷川『良寛禅師の悟境と風光』117頁）、このような解釈で

少小学文懶為儒
少年参禅不伝燈
今結草庵為宮守
半似社人半似僧　(331)

この詩で良寛は、自分を顧みて自嘲している。大森子陽の漢学塾・三峰館で学んだが儒者になる気にはなれず、円通寺に入り以後永く修行した；しかし結局、法系を伝える者とはなれなかった；今は乙子神社の境内に住んで、半分神官・半分僧侶の宙ぶらりん人間の有り様だ、と。

かれは和歌でも、

法の道　まことは見えで　昨日の日も　今日も空しく　暮らしつるかな(473)、
何ゆへに　我身は家を　出しぞと　心に染めよ　墨染めの袖　(464)

と自分を詠う。

身をすてて　世を救ふ人も　在すものを　草の庵に　ひまもとむとは(1077)

の歌は、山中の草庵で清貧枯淡の生活をしていること自体を、世のため人のため捨て身で尽くしている人びとと比べて、「安易だ」と自嘲対象にした歌である。

しかしながらわれわれは、自嘲しつつも自分の現在の生き様を受け入れ、前向きに進む良寛をも、この関連で見ておかなくてはならない。

たとえば次の詩では良寛は修行の日々を回顧し、「自分はもともと、伸

は、この詩の前半で乙子神社の草庵における自分の精進を語ることとの関連が理解できなくなるし、良寛が知人たちをも実は軽蔑していたことになり、不自然である。また「拾葉人」については、同じ乙子神社期の和歌に「乙宮の　杉の陰道　踏み分けて　落葉拾うて　この日暮しつ」とある。「拾葉人」は、良寛のことであると思われる。ここでは、谷川敏朗の校注に従う。

びる材のものではなかったのだ」と評価するのだが、しかしまた、出来が悪いなら悪いなりに独り静かに信仰生活を続けていこうとの決意をも新たにしている：

珊瑚生南海
紫芝秀北山
物固有所然
古来非今年
伊昔少荘時
飛錫游千里
頗叩古老門
周旋凡幾秋
所期在弘通
誰惜浮漚身
歳不与我共
已矣復何陳
帰来絶巘下
采蕨供昏晨　(94)

若かった頃は、悟りを求め全国を旅し諸処の高僧に教えを受け、厳しい修行をも続けてきた。そうした懸命の日々を重ねはしたが、その成果はまだ得られていない。だがこれも、もって生まれた筋の悪さのゆえなのだ。嘆いてみても、仕方がない。珊瑚は南国の温かい海で少しずつ増え、紫芝は北国の高山で少しずつ成長する。自分は、めぐりめぐって故郷の地、弥彦・国上山の山懐にいる。ここに腰を据え、蕨を夕べの供花としつつ暮らし、小さくとも確実な成長を積んでいくしかない、と。自分の成長のなさへの嘆きとともに、そのような無力の者であるならば、そのような者として一歩一歩の小さな歩みを大切にしよう、との覚悟を示した詩である。

次の詩には、冬の到来を物語る夕暮れの烈風に突如襲われ、一瞬ひるみながらも、意志の力でその風に向かって歩みだす良寛の姿が、しっかりと

描かれている。

終日望烟村
展転乞食之
日落山路遠
烈風欲断髭
衲衣破如烟
木鉢古更奇
未厭饑寒苦
古来多如斯　(132)

一日、村々を托鉢して廻ったあと、草庵へ帰ろうとして山中で日が暮れてしまった。庵までは、まだまだ遠い。突如、激しい寒風が吹き付けてきた。烈風に煽られる衣はボロボロ。見れば、（托鉢用の）木鉢もすっかり古びてしまった。年老いても、自分はこんな姿で生きていることだ…。それでも良寛は、先人たちはこの貧しい孤独を生き抜いたのだと、一瞬のひるみを切り返し、上の庵へと再び歩み出すのだった。

良寛が親しんだ中国の伝説的な僧である寒山（良寛はかれの詩とその清貧枯淡の脱世間的な禅的生活を愛した）も、

黙黙永無言
後生何所述
隠居在林藪
智境何由出
枯稿非堅衛
風霜成天疾
土牛耕石田
未有得稲日

と詠っている[22]。ただ独り、語り合う者ももたず修行するだけでは、得たも

(22)『寒山詩』（太田悌蔵校注、岩波文庫、1996）。

のを後世に残すことのないままに自分は消えてしまう。深い山野に隠れて棲むだけでは、真理をどうやって世に伝えられよう。隠者然として痩せ衰えているのも、思えば健康なことではない。雨風にさらされ若死にするか身体に障害をもつのが落ちだ。牛の土人形が石田を耕しても実りがないのと同じことだ、と。この寒山詩にも自分に対する厳しい検証・自省・自嘲が見られる。修行の成果を誰にも伝えられないのは無意味なことだ、との思いがよぎる。しかし寒山は、それでもそれを受け入れ、只管打坐の「なり切る心」で独り「隠れて生きる」ことを止めなかったのだ。

寒山と良寛はともに、孤独も自分への失望も、こうしたかたちでの作詩によって耐えていったようでもある。

4　社会との関わり

隠遁者のような生活ぶりだったが、かれは人びとの貧困、災難、暴動等に深く関わっていた。

1783年には岩木山、続いてアイスランドのラキ山とグリムスヴォトン山、浅間山が大噴火を起こし[(23)]、そのことも原因して天明の大飢饉が深刻化した。ひどい不作はその後も続き、1810年には越後地方でも窮乏化した民衆による打壊しが激化した。1814年にも、各地で一揆や打壊しが発生した。ちょうどフランス革命と重なる時代だ。このときの村々の様子を良寛は、描いている：

可嘆世上人心険
不知何処保生涯
夜夜前村打鼓頻
盗賊徘徊百有餘　（69）

(23)　不思議なことにこの後約30年の間、大噴火が相次いだ。すなわち、1812年にカリブ海のスーフリエール山が、1814年にはフィリピンのマヨン山が大噴火し、1815年には史上最大規模の噴火であるジャワ島タンボラ山噴火が起こっている。

我が草庵の下の村で、夜ごとに太鼓が激しく打たれる。百人もの「盗賊」が村々を襲いまわっており、村人が警戒警報を発しているのだ。だがその「盗賊」とは、困窮のあまり打ち壊しに出た農民たちのことである。人びとの窮乏化は、この時代に極度に達した。

むらぎもの　心をやらむ　方ぞなき　あふさきるさに　思ひ乱れて　(934)
かくばかり　憂き事知らば　奥山の　草にも木にも　ならましものを　(938)
我が袖は　しとどに濡れぬ　うき世の中の　ことを思うに　(942)

は、良寛がこうした窮乏の人びとを思いやって深く心を痛めている歌である。これに対し、

領(し)ろしめす　民が悪しくば　我からと　身を咎めてよ　民が悪しくば　(941)

は、民をこのような窮乏に追いやっている為政者に対する警告の歌である。

良寛が貧しい人びととどのように個人的に関わっていたかについては、次のような歌がその一端を語っている。

神無月の頃　旅人の蓑一つ着たるが　門に立ちて物乞ひければ　古着ぬぎて取らす　さて　その夜　嵐のいと寒く吹きたりければ
　たが里に　旅寝しつらむ　ぬば玉の　夜半の嵐の　うたて寒きに　(844)

良寛は、物乞いする者に自分の着ている物を与えた。ところが夜になって、嵐が襲ってきた。その寒風につけても良寛は、去っていった貧者のことを思いやっているのである。

この事件には後日談がある。良寛は、冬が近づいたのに衣を失ってしまい寒さが耐えられないとして、友人に次のような援助を乞う手紙を送っている。

「寒天の節如何御暮被遊候や。野僧無事に居過候。然ばもめん衣なくいたし、

不自由に候。もめん二たん　墨染になし被遣可被下候。ひとへに頼入候。以上　十月五日　良寛[24]」

良寛はまた、「盗人に　取り残されし　窓の月」と詠んでいる。かれはこれを、乙子神社の草庵に入ってきた貧しい盗人に、わざと眠ったふりをして夜具を剥いでもっていかせたあとで詠んだ。夜具さえ盗らせ何もなくなってしまったが、月だけは盗り残されて窓の上で煌々と輝いている、と。

次のような手紙も遺っている。正月 4 日にはじめて乞食に里に出たときのこと、良寛は、夫が行方不明となり幼子たちをつれて物乞いして暮らす女性に出会った。自分には金銭がなく援助できなかった良寛は、友人の解良叔問宛てに次のような手紙を書き、その女性にもたせやった。

「叔問老　良寛　是はあたりの人に候。夫ハ他国へ穴ほりに行きしが、如何致候やら去冬は帰らず。こどもを多くもち候得ども、まだ十よりしたなり。此春は村々を乞食し而、其日を送り候。何ぞあたへて渡世の助にもいたさせんとおもへども、貧窮の僧なれバ、いたしかたもなし。なになりと少々此者に御あたい可被下候。　正月四日[25]」。

良寛はまた別の日には、どの宿でも泊めてもらえず困っている貧しい旅人と出会い、手にもっていた品の包み紙に、「此人　一夜御とめ可被下候　良寛」としたためてもたせ、富裕な知人のところに送っている[26]。ここにも良寛の身近の貧困、それに関わるかれのやさしさ、細やかな心遣いが伝わってくる。

かれのような隠遁者でも、こうした窮乏と至るところで出会っていたのである。

---

(24)　前掲注 7・谷川敏朗校注『良寛の書簡集』372頁。
(25)　前掲注 7・谷川敏朗校注『良寛の書簡集』135頁。
(26)　前掲注 7・谷川敏朗校注『良寛の書簡集』390頁。

疫病や天災も、かれが住む地域をしばしば襲った。良寛は、その度に人びとの苦しみに心を痛め、また多くの悲しい別離を体験した。たとえば1818年には天然痘の大流行があり、付近の村々でも多くの人が死亡した。この出来事に関わって良寛は、「去年は疱そうにて子供さはにうせにたりけり。世の中の親の心に代はりて詠める」との詞書きをしたうえで、多くの和歌を詠んでいる：

あづさ弓　春も春とも　思ほへず　過ぎにし子らが　ことを思へば（580）
いつまでか　何嘆くらむ　嘆けども　尽きせぬものを　心まどひに（584）
思うまじ　思うまじとは　思へども　思い出だして　袖しぼるなり（589」

1828年11月12日には、三条大地震があった。死傷者は3000名を越え、全壊・焼失した家屋は１万余戸に達した。この地震を詠った、かれの和歌がある：

うちつけに　死なば死なずて　永らへて　かかる憂き目を　見るがわびしさ（1081）

地震で多くの人が亡くなったが、自分は生き残った。このため自分は、人びとの悲惨を目撃し心を痛めている、と。

良寛はこの時、地震で子供を失った、前述の親友の山田杜皐に手紙で

「災難に遭時節には災難に遭がよく候。死ぬ時節には死ぬがよく候。是はこれ災難をのがるる妙法にて候」

と述べている。こういう中身の手紙は、親しくない者がもらうと冷たく響くだろう。しかし、人を見て法を説け、である。心からの友人には、不幸を自らにしっかり受け止めて立ち直る姿勢を促すものと、また、仏教の教え、良寛がたどり着いた後述の「騰騰任天眞」の立場からの励ましとなるだろう。しかも杜皐は、良寛が地震の犠牲となった多くの人びとの悲惨な状態を目の当たりにして悲しみを溢れさせていたことをよく知っているの

だ。

1829年 5 月には、越後地方が台風に見舞われ、その後さらに大旱魃が襲ってきた。冷害・信濃川の大氾濫については、良寛の次のような詩がある。

凄凄芒種後
玄雲鬱不披
疾雷振竟夜
暴風終日吹
洪潦襄階除
豊注湮田菑
里無童謡声
路無車馬帰
江流何滔滔
回首失臨沂
凡民無小大
作役日以疲
畛界知焉在
堤塘竟難支
小婦投杼走
老農倚鋤睎
何幣帛不備
何神祇不祈
昊天杳難問
造物聊可疑
孰能乗四載
令此民有依
側聴野人話
今年黍稷滋
人工倍居常

寒暖得其時
深耕兮疾耘
晨往夕顧之
一朝払地耗
如之何無罹　(103)

ものすごく不気味な夕暮れの後、台風が襲い、ついに信濃川が氾濫した。濁流が田畑の作物を呑み込み、村々に襲いかかった。今年は農民たちがとりわけ一生懸命に働き、実りの秋を迎えようとしていたのだったが、その努力の結晶が一瞬にして無に帰してしまった、と。

さらにその翌年の1830年６月には大干魃が襲った。良寛は、何日も何日も続く日照りで苦しんでいる農民たちに同情して、次のような一連の歌を詠っている：

今日の日を　いかに消たなむ　うつせみの　うき世の人の　いたましくも惜し (1137)
鳴る神の　音もとどろに　ひさかたの　雨は降り来ね　我が思うとに (1138)
我さへも　心にもなし　小山田の　山田の苗の　しほるる見れば (1152)
あしびきの　山田の小父が　ひねもすに　い行きかひらへ　水運ぶ見ゆ (1153)
ひさかたの　雲の果たてを　うち見つつ　昨日もけふも　暮らしつるかも (1155)

同年の９月には、稲の収穫を迎えて長雨が異常なまでに続いた。このときにもかれは、農民たちに同情して詠っている：

ひさかたの　雲吹き払へ　天つ風　うき世の民の　心知りせば　(1160)
秋の雨の　日に日に降るに　あしびきの　山田の小父は　奥手刈るらむ (1165)
奥手刈る　山田の小父は　いかならん　ひと日も雨の　降らぬ日はなし

これらは、直腸ガンが悪化して良寛が危篤になる 2 ヶ月前の歌である。良寛は、そのような重症のなかでも、困窮している人々へのやさしさを失わなかったのだ。

良寛には、激しい世相批判、さらに文芸界や仏教界の現状に対する批判も、見られる。

当時の仏教界の堕落に対する批判には、次のようなものがある：

自澆風蕩淳
不知幾日子
書生偏流文
釈氏固執理
寥寥千載下
無人論斯旨
不如従児童
遅日打毬子　（261）

良寛は言う、人間関係が殺風景化して温かい気持ちが無くなっている。学者は形式主義にとらわれ、僧侶は自派の教説に固執する。こうして永らく、そのもっとも大切なものが失われつつあるのだ。そこでわたしは、春の日差しの中で子供たちといっしょに毬で楽しく遊んで、その自分の自然さを大切にしていくのだ、と。真摯な究理・求道の姿勢から来る、文芸界・仏教界批判である。

次のような社会批判の言辞も見られる。貧富の差の激しい現状を目撃し、良寛は書く：

富家不急費
日々輸無究
貧士為口腹

区々東西走
安省不急費
不沾貧士喉
彼此互分憂
生民有余祐　（260）

富んだ人びとは、無駄なものに費出して暮らしている。他方、食うものさえない貧しい人びとは、飢えをしのぐものを求めてさまよう。富んだ人がその無駄な出費を同情心をもって飢えた貧民に与えれば、みんなが食を得て生存できるのに、と（他に、102・133）。これらにも、良寛の、社会的公正への厳しい姿勢と、かれの温かいが芯に強いものをもった性格とが出ている。

5　行禅・求道

良寛は、日々座禅に勤しんだ。雪に閉ざされた中でも、孤独に苦しむときにも、重病に苦しんだその晩年においても、かれは静かな庵で座禅三昧に入っていく。その様なときには、孤独感や老いゆく不安・虚しさの意識でつぶされそうな弱気の良寛は、もうすっかり消えている。修行で鍛え上げた、不動の強い精神が、かれを支えるのだ。おのれの弱さや矛盾を気にして悩む近代的自我は、良寛のものではない：

千峰凍雲合
万径人跡絶
毎日只面壁
時聞灑窓雪　（185）

五合庵時代、友人の鈴木隆造に贈った詩である。山々は動かぬ重い雪雲に被われ、雪が激しく降り続く。山の中腹でのまったくの孤立状態が、永く続いているのだ。恐怖と寂しさに押しつぶされそうな、その情況下で、し

かし良寛は淡々と日々、面壁を続けていく。

孤独下での只管打坐は、乙子神社に移ってからも続く：

国上山下乙子傍
幽径苔滑少人行
陰虫切切吟四壁
驟雨蕭蕭灑草堂
世上栄枯飽看却
夢中迷悟曽商量
孤坐寥寥過半夜
香炉烟消冷衣裳　（335）

国上山に抱かれた乙子神社の杜、独りいる秋の雨夜だ。静かな闇の中で虫たちがしきりに鳴く。人の訪れは絶えて久しく、孤独感が募る。だが良寛は、世の栄枯盛衰に流されないで生きることを大切にし、満ちたりた心で深夜の座禅にいそしむ：

回首七十有余年
人間是非飽看破
往来跡幽深夜雪
一炷線香古匆下　（347）

冬の深夜、雪はますます激しさを増し、人の訪れは当分なくなった。物音しない庵に独りあって、良寛は60余年の人生を振り返り、俗世を離れて静かに生きられることの幸せを嚙みしめる。そしてその満ちたりた心で、香りの良い線香をくすぶらせつつ坐りやがて静かな境地に入っていく。

梅雨の暗い日にも、良寛は座禅に励む：

蕭蕭黄梅雨
山村少人行
檐前木葉暗
屋後急渓声

経従埃塵埋
雨注蜘蛛縈
日日空窓下
孤坐消幽香　（336）

雨が降り続き、人の訪れは途絶えてしまった。山中の小さな庵は、濃い緑の木々に被われ昼なお暗い。後の方では、水かさを増した谷川が音を高めた。蜘蛛の巣が雨に濡れて光る窓辺で、良寛は線香の煙とともに禅境に入っていく。

次も、長雨の季節の座禅の詩だ：

我従来此地
不知幾青黄
藤纏老樹暗
渓蔭脩竹長
烏藤爛夜雨
袈裟老風霜
寥寥朝又夕
為誰払石床　（310）

良寛は、木や竹が生い茂った山中の草庵で、静かに人生を振り返りつつ、老いの身でもなお、朝夕に座禅の時を重ねる。それは、誰のためか、何のためか。座禅すること自体が求道者としての自分の生そのものだから、と言うほかないであろう。

良寛は、孤独な静かな草庵での読書（や詩作、習字等）をこよなく愛した。知人から借用してきた書物を、楽しんで読んだ。前述のように、老いた身での孤立した生活はかれを不安がらせはしたし、里人たちとの交わりを断たれる深雪や長雨の季節は、かれを孤独にした。しかし良寛は、また他面ではその孤独を愛してもいた。かれの人生の師であった芭蕉にとって

そうだったのと同様、貧しい中での孤独感は良寛にとってこよなき芸術・思索の源泉・意欲の源であった。(27)

雪ですべてが閉ざされた夜や雨の降る宵は、とりわけ貴重な読書の時間となった：

玄冬十一月
雨雪正霏霏
千山同一色
万径人行稀
昔游総作夢
草門深掩扉
終夜焼榾柮
静読古人詩　(119)

厳冬の越後だ。何日も激しい風と雪が続く。雪に閉ざされた草庵、訪れる人は、およそない。花を愛で子供たちと遊んだ日々は、遥かな思い出となってしまった。良寛は、いろりで薪が燃える音を聞きながら、古い代の詩文を読んで、独りの静かな時を過ごす。

雨夜の静かな読書も、かれの心を充たしてくれる。寒山の詩を吟じて、良寛は詠う：

終日乞食罷
帰来掩蓬扉
炉暁帯葉柴
静吟寒山詩
西風吹夜雨
颯颯灑茅茨
時伸双脚臥
何思復何疑　(112)

(27)　竹村牧男『良寛の詩と道元禅』（大蔵出版、1978）。

貧しい乞食僧の生活ではあるが、美しい自然の中での古典に親しむ生活で心は満ちたりている。激しい風雨に打たれつぶれそうな頼りないこの草庵。しかし独りゆったりと足を伸ばし仰向けになれば、充ちたりた気分がとても快い、と。

春まだき薄ら寒さの草庵でも、かれは書物を手に静かな時を過ごす：

此生何所似
騰騰且任縁
堪笑兮堪嘆
非俗非沙門
蕭蕭春雨裡
庭梅未照莚
終朝囲炉坐
相対也無言
背手探法帖
薄云供幽閒　(413)

一体、自分のこの生き方は、どう評価すればよいものなのか。自分は、自由に、こだわることなく生きてきた。出家した身でありながら、僧侶としての在るべき生が送れているわけではない。自分は、今何なのか。自嘲にしか値しない存在にすぎない。もう暦では春だというのに、梅はまだ咲かない。一日中、独り静かにいろりの火にあたりながら、とり出した書道の手本を使って字の練習をする。じっくりとこの寂しさがもつ情趣を味わいつつ、自分は過ごしている、と。孤独の中での自省も、ここでは前向きの意識に基盤を置いている。

こうしたかたちで孤独を楽しむ前向きの姿勢も、自分の弱さが気になって悪戦苦闘する近代人の自我などとは異質である。(28)

(28)　この点については荒井魏も、「御風の見方は一面当たっているかも知れない。が、弱さ以上に、良寛さんの場合、強さ、激しさが出家の背景にあった可能性はないだろうか」と指摘している（荒井魏『良寛の四季』（岩波現代文庫、2008）63頁。

良寛は、道元に対する深い敬慕をもち続けた。その晩年においても、道元に導かれ生きようと努めた。「読永平録」と題した漢詩から、このことが読み取れる：

春夜蒼茫二三更
春雨和雪灑庭竹
欲慰寂蓼良無由
背手摸索永平録
明窓下几案頭
焼香点燈静被読
身心脱落只貞実
千態万状竜弄玉
出格機檎虎児
老大風像西竺
憶得疇昔在円通時
先師提持正法眼
当時洪有翻身機
為請拝閲親履践
転覚従来独用力
自茲辞師遠往返
吾与永平何有縁
到処奉行正法眼
従爾以後知幾歳
忘機帰来住疎嬾
今把此録静参得
廻与諸方調不混
玉兮石兮無人問
五百年来委塵埃
職由是無択法眼
滔滔皆是為誰挙

慕古感今労心曲
一夜燈前涙不留
湿尽永平古仏録
翼日隣翁来草庵
問我此書因何湿
欲道不道意転労
意転労兮説不及
低頭良久得一語
夜来雨漏湿書笈　(317)

春の宵の静かな草庵、雪交じりの雨が篁に注ぐ。寂しさを慰めるもののないまま、『永平録』を手に取る。線香の煙がかそかにくゆる窓辺で、それをひもとく。進むにつれて読み浸り、道元の清澄で厳格な姿、身心脱落に関する深い思想が身にしみいってくる。そして道元の教えに導かれつつ自分は修行してきたのだと、その日々を懐かしく思い出す。だが今日、その道元の教えが世にすっかり忘却されているのだ。なんと、惜しむべきことよ。良寛は深い悲しみに襲われて、思わず涙をあふれさせ、書物を濡らしてしまった。明くる日に、村の友人がやってきて、書物が濡れているのを見て不思議に思い、理由を問う。良寛は本当のことを話すことができず、「昨夜の雨漏りで、すっかり濡れてしまった」と答えた。

この詩には良寛の、道元に対する深い帰依、真摯な求道、老いてなお続く学びの姿勢が鮮明に出ている。

6　悟境の射程

良寛の行態を、かれが修行で達した悟境[(29)]の観点から考えるのは、かれの

(29)　ここで悟境とは、あることを契機にして突如、身心脱落の体験をした大悟の瞬間のことだけではなく、その体験を踏まえつつその後に続く修行生活の中で固まっていく、任運自在の原理による、精神と性格全体の軽やかさ・強さを指す。

経歴を踏まえると自然なことである。同時代にも良寛の行態とその悟りとの結びつきに関する証言が、次のように見られる。すなわち前述のように良寛は、1790年、33歳の時に国仙から印可証明を受けたが、その時国仙が良寛に与えた偈文は、次のようなものであった：

附良寛庵主
良也如愚道転寛
騰騰任運得誰看
為附山形爛藤杖
到処壁間午睡閑(30)

良寛よ、おまえは実に静かで心がゆったりしている。すべてを大自然の大きな動きに任せて悠然としたおまえの生き様は、他人から理解され難いだろうが、大したものだ、と。国仙は良寛の複雑な性格を鋭く読み取り、的確に表現している。「愚」であることは、良寛の元々の性格（真面目さ・一途さ・寡黙・詩人気質）であるとともに、身心脱落、任運自在の態様でもあることを、国仙は証言している。

同様な証言が、もう一つある。大忍魯仙という、良寛と深い交わりがあった僧（良寛より23歳年下で、出雲崎の隣村・尼瀬に生まれ深谷の曹洞宗の寺の住職であった）が、1805年刊のその詩集『無礙（むげ）集』中の「良寛道人を懐ふ」という詩において、

「良寛老禅師、愚の如く痴の如し。身心総て脱落、何物か又疑うべけん。名利の境に住まず、是非の岐に遊ばず。朝には何処に向って往き、夕には何処に向ってか帰る。かの世人の誉るに任せ、かの世人の欺くに任す。師曾て吾が盧に到り、吾れに微妙の辞を告ぐ。吾れ又久しく病いを抱え、師に因って既に医すを得たり。其の恩や実に限りなく、何を以てか又之に報いん」

と詠んでいる(31)。この詩は大忍25歳の時の詩であり、それゆえ良寛は48歳頃

（30）　前掲注27・竹村牧男『良寛の詩と道元禅』125頁。
（31）　小松正衛『良寛さま』（保育社、1985）38頁。

であった。ここで大忍は、壮年期の良寛の、愚直で魯鈍に見え名利・是非分別を超越した飄々たる姿が、身心脱落によるものであると見ている。

さらにもう一つ、良寛の若い時の行態と悟境との結びつきの特徴を語る資料がある。良寛より18歳若い文人の近藤万丈が、37歳頃の良寛らしき人物に土佐高知で出会った時の記録が、それである。万丈はその随筆集『寝覚めの友』に、次のように書いている：

「おのれ万丈よはひいと若かりしむかし、土佐の国へ行きしとき、城下より三里ばかりこなたにて雨いとう降り、日さへくれぬ。道より二丁ばかり右の山の麓に、いぶせき庵の見えけるを行きて宿乞ひけるに、いろ青く面やせたる僧のひとり炉をかこみ居しが、喰ふべきものもなく、風ふせぐべきふすまもあらばこそといふ。雨だにしのぎ侍らば何か求めんとて、強てやどかりて、小夜更くるまで相対して炉をかこみ居るに、此僧初めにものいひしより後は、ひとこともいはず、座禅するにもあらず、眠るにもあらず、口のうちに念ぶつ唱ふるにもあらず何やら物語りても、只微笑するばかりにて有りしにぞ、おのれおもふにこは狂人ならめと、其夜は炉のふちに寝て暁にさめて見れば、僧も炉のふちに手枕してうまく寝居ぬ。扨明けはてぬれど、雨は宵よりもつよくふりて立出づべきやうもなければ、晴れずともせめてしも小雨ならんまで宿かし給はんにやといふに、いつまでなりともと答へしは、きのう宿かせしにもまさりて嬉しかりし、ひの巳の刻過ぐる頃に麦の粉湯にかきまぜてくらはせたり。扨その庵のうちを見るに、ただ木仏のひとつたてると窓のもとに小きおしまづき据て其上に文二巻置きたる外は何ひとつたくわへもてりとも見えず、このふみ何の書にやとひらき見れば、唐刻の荘子なり。そが中に此の僧の作と覚しくて、古詩を草書にてかけるがはさまりてありしが、から歌ならはねば、其巧拙はしらざれども、その草書や目を驚かすばかりなりき。よりて笈のうちなる扇ふたつとふで、賛を乞ひしに言下に筆を染めぬ。ひとつは梅に鴬の絵、ひとつはふじのねを描きしなりしが今は其賛はわすれたれど、富士の絵の賛の末に、かくいふものは誰ぞ、越州の僧了寛書スとありしを覚え居ぬ。其日もまた暮れちかきに雨は時しくにふりてやまざれば、その夜もきのふのごとく、僧とともに炉のかたはらにいねしが、明れ

ば雨は名ごりなくはれて日の光かがやきぬ。例の麦の粉くらひて、二夜の報謝にいささか銭をあたへけれどかかるもの何せんとてうけひかず、其こころざしに戻らんも本意ならねば、引かへて紙と短尺とを与へけるをば、よろこびてうけ納めぬ。[…][(32)]」

ここには、その清貧枯淡な生活（空っぽの室内、粗食、金銭への無頓着といった）や、こちらが話しても一言も返さずただ穏やかに微笑する寡黙さが描かれている。このような良寛が万丈に、「こは狂人ならめ」との印象を与えたのであるが、良寛のこのもの静かさは、後のかれについて解良栄重が『良寛禅師奇話』において、「師、常ニ黙々トシテ動作閑雅ニシテ余有ルガ如シ」、「其飲食起居舒ロニシテ愚ナルガ如ク」と書いたところと重なる。これが大悟による生の雰囲気であること、禅の修行を重ねた者の、精神の定まりであることは、前述の、国仙の「良也如愚道転寛」、大忍の「愚の如く痴の如し」が指摘する雰囲気と通底していることからも推測できる。

同時にここでの若い良寛には、困っている旅人を泊めてやり食事を与えるやさしさが出ており、修行中とはいえ、沈黙行を金科玉条とし木石のように無反応になった人ではない温かさも見られる。

後年における良寛の行態は、既にここに認められると言える。

ところで万丈は、他方では、ここでの良寛に『荘子』への傾注、書道、とくに草書の秀逸さ、漢詩の研鑽など――これまた後年の良寛と変わらない姿である――をも見ている。実際、これに続くすぐ後の時期、良寛の初期の和歌や漢詩からは、自然の現象に対する敏感な感覚、旅の苦しさへの芸術的反応、歌枕の内面化（歌枕のメッセージを思想において受け止める姿勢）などが読み取れる。

良寛は、漢学を大森子陽（徂徠学を修めた北越四儒の一人）の下で 6 年間学んだことによって、またかれの生家が――以南（注 5 参照）や弟の由之

(32)　前掲注13・相馬御風『一茶と良寛と芭蕉』131-132頁より引用。

や香、妹・みか等の俳句や和歌からうかがえるように――上品で繊細な歌の心が豊かな世界であったことによって、すでに出家前から感受性の高い、文芸にも向かう若者としてあった。加えて、禅宗僧侶の間では修養として漢詩、和歌、茶道、華道等を学ぶことが伝統であり、とくにかれが師事した国仙は堂上派風の和歌を詠む教養人でもあった[33]から、良寛も光照寺に入った18歳頃以来、さらには円通寺で過ごした11年間、それらの文芸によっても人格形成をしえた。後述のように、そうした教養が、かれの繊細さ、もののあわれへの感覚、および禅の修行とあいまって、良寛独自の悟境をもたらした。

万丈が土佐で出会った良寛は――その後の、そしておそらくその前の良寛とも変わりなく――静かな枯淡と温かさ、敏感な感受性との複合性に生きていたと言うべきであろう。

この最後の点との関連で、良寛の仙桂再評価に言及しておこう。良寛が円通寺で修行していた頃、15歳先輩の修行僧に仙桂という人物がいた。良寛はその晩年にこの仙桂が逝去したとの報に接し、次のような詩を詠んでいる：

仙桂和尚真道者
貌古言朴客
三十年在国仙会
不参禅不読経
不道宗文一句
作園蔬供養大衆
当時我見之不見
遇之遇之不遇
吁嗟今放之不可得
仙桂和尚真道者　（479）

（33）　前掲注28・荒井魏『良寛の四季』134頁。

仙桂は、風貌が冴えず木訥のうえ、典座職に徹し、食事作りとそのための野菜栽培に専念し、このため座禅も読経もせず、議論もしなかった。当時自分は、この仙桂を見てもただ無視するばかりだった。しかし自分はこの年になって初めて、このようなかたちの修行の道を黙々と歩んだ仙桂こそが真の道者であると考えるようになった、と言うのである。この詩は、良寛の精神が深まった証として研究者の間で高く評価されている。しかし良寛がこの詩を書いた後、その生き方を変え仙桂のそれに近づけたかといえば、そうではなかった。そもそも典座職が重要な修行の道であることは道元がその体験を通じて重視しているところだから、円通寺にあって良寛がそれを知らなかったはずはない。かれは、あえて仙桂とは異なった生き方を是として来たのである。しかも良寛は、上記のように、座禅をとってみても、経典や宗門の原典・詩文への傾注、激しい学びの姿勢をとってみても、およそ仙桂とは異なった生き方をし続けた。かれの体質からして良寛は、仙桂の自己にこだわらない強い生き方にあこがれはしても、そうしたかたちで無に徹し、行禅や作務・典座だけで生きられる人ではなかった。上の詩はそれゆえ良寛が円通寺にあって文芸にも秀でたエリート僧として修行し、仙桂のような人は眼中になかったことへの反省と、今でも文芸・交際等を断ち切れず仙桂的には生きられないことへの思い、あるいは仙桂が実践したような、人知れず自分の道をゆき天命をまっとうすることへの決意を、詠んだと理解すべきであろう。

悟境・只管打坐とはいっても、良寛のケースはあまりにも多彩で、感情豊かで、ユニークであったから、仙桂的生ではありえないのである。

ここで悟境と性向との関係について考えておこう。見性を得て以前とはすっかり人が変わった、といったケースもあるかもしれない。そのようなケースに属す禅者同士ならば、見性後相互に同じような雰囲気・性向を醸し出す可能性も高い。たとえば任運自在の心によって、「如愚道転寛」、「愚の如く痴の如し」、「こは狂人ならめ」といった様相を共に呈する、と

いうことがありうるかもしれない。しかし歴史上の多くの禅者を見ても、それぞれが個性をも際立たせている。このことは、各人の個性や環境等がその大悟に作用し、かつその後の悟境の有様を規定したからだと考える他ない。

上のことはたとえば、生き様に多くの点で似ているところのある、一休宗純と良寛との比較から一段と鮮明になる。すなわち、①二人はともに、禅の道の達人であり、共通の師道元と同様、閑地を求めそこにおいて清貧枯淡な生を生きた。②文芸にひいで、感受性も豊かであった[34]。③変人性ないし風狂性が強かった。④遁世者として生きつつ民衆と親しく交わるが、他方では同時代の腐敗した仏教界を厳しく批判した（一休は先輩の養叟たちをその「堕落」のゆえに激しくののしり、良寛も道元の教えを忘れているとして仏教界を批判した）。⑤悟者であるはずなのに、一休が先輩その他に対しておこなった攻撃の仕方は激烈を極めている。一休はまた、「女犯」に耽溺した。他方の良寛は、悟者であるはずなのに、孤独・生来への不安を生々しく記録している。⑥ともに後年は浄土教への傾斜、すなわち「禅浄一致」の立場を強め、またその他の宗派や神道にも開かれた心を示した。⑦飲酒肉食をタブー視しなかった。⑧ともにその晩年において美しい若い女性との深い交渉があった。すなわち一休は森女（しんじょ）と同棲し、良寛は貞心尼と師弟関係を固めた。これら①～⑧のすべてが、両者の――悟境と切り離

(34)　一休が建仁寺における修行時代の15歳の時につくった次の詩、「春衣宿花」は、洛中で愛吟されたという。

吟行客袖幾詩情
開落百花天地清
枕上香風寐耶寤
一場春夢不分明

花見の晴れ着を着て、桜が満開のこの地を歩くと、詩情があふれ出す。あちこちで桜が花びらを舞い散らしている光景は、すがすがしい。花の下に伏すと、その香に包まれる。うっとりとして、夢の中で見ているのか現でか、もう分からなくなった、と。その早熟の文才とともに、自然との一体感、美への高い感受性がうかがえる。二橋進『一休　狂雲集』（徳間書店、1974）24頁。

せない――心の寛さ・自由さを示していると言えるだろう。

しかし二人の間には、相互に大きく異なる点もある。一休が激しい攻撃性をもち、偏執的なまでに風狂の人であった[(35)]のに対し、良寛には攻撃的な性向が無い（かれには堕落した仏教界や俗界に対する批判の詩はあるが）。良寛は、肩を張らず自然に生き、かなり無抵抗主義的であり、また強い美的感覚の人であり、かつ全体に素直さ・温かさの人である。そして良寛のこのような傾向性は、かなりの程度、生来のものであった。

偉大な大悟者同士として相似た性向を示す二人ではあるが、しかし本来の性格等が作用して、大悟後の行態を異ならしめた点は、否定できないだろう。

この問題に関連して、良寛と道元とを比較考察した長谷川洋三の議論をここで扱っておこう。その『良寛禅師の真実相[(36)]』の第 7 章「道元禅師との相違」において長谷川は、道元が「情の表出を極度に警戒しておられた」のに対し、良寛は「馥郁とかおる梅花の花にじっとしてはおられなくな」り酒に酔ったまま詩を書くような「自由自在」の人であった、と言う（長谷川は、「道元禅師には情趣や色どりが欠け、良寛禅師にはそれが満ちあふれていた」とも言う）。そしてこの関連で長谷川は、「魂の最深部にある菴摩羅識（清浄識＝佛性）」が目覚めさえすれば、五感が感受する五識は「成所作智」という佛智へと昇華するのであり、良寛はその「成所作智」と第六識の「妙観察智」とをともに目覚めさせえたがゆえに、あのような独特の詩を書くようになった、とする（同書105頁）。長谷川のこの見方だと、良寛の作品はすべて――その孤独感や不安、虚しさの意識の詩も含め――「成所作智」と「妙観察智」の表出物だということになってしまう。

良寛の作品にその悟境が直接／間接に関わっているのは確かだろうが、

---

(35)　高文漢「中世禅林の異端者――休宗純とその文学」（国際日本文化研究センター、日文研フォーラム報告書第104回、1998）。

(36)　長谷川洋三『良寛禅師の真実相』（改訂版、木耳社、2005）。

問題は、どの作品には悟境がどの程度直接に作用しており、どの作品には間接的にしか作用しておらず、さらにどの作品にはほとんど作用していないか、の識別だ。その悟境が語られおり、かつ悟境の雰囲気が漂っている、という意味で悟境と結びつけなくては理解できない作品も、良寛には確かにある。だが、悟境とは結びつかない作品も、数多くあるのだ。

悟境の表出として受け止めるべき歌には、次のようなものが入るだろうか：

生涯懶立身
騰騰任天真
嚢中三升米
爐邊一束薪
誰問迷悟跡
何知名利塵
夜雨草庵裏
雙脚等閑伸　(114)

この有名な詩において良寛は、雨夜の五合庵でその独り暮らしを顧み、最上の充足感を味わっている。立派な人になろうと努めるようなことは、自分の生き方ではない。起こることを素直に受け容れて、自然の動きのまま自分は生きる；さっぱりとした空っぽの草庵、ここでゆったりとして暮らすのだ、と。「騰騰任天眞」とは、禅道において身心脱落の境地を指すから、この詩にはかれの高い禅の境地が表出している。だがかれは、それを自分の昔からのものぐさ癖と重ねて描いてもいる。(37)

(37)　このような良寛だったが、それでも生きるためには様々な仕事があり、忙しかった。かれは、解良叔問宛の手紙で、次のように告白している。「先日はてぬごひとふゆ　菊落手仕候　今朝は御手紙　辱拝見仕候　僧も一両日以前帰庵仕候　何やかやとり乱　冬のしたくも　いまだととのはず候　少し間に成候ハバ　参上仕度候　山住の身さへ閑ならぬに　世に交る人ハ　いかがあるらむと　おしはかられ候　何事を営むとしもなけれども　閑かにくらす日こそすくなき。」冬が近づけば、薪集めをし味噌やつけものその他を一人でつくらねばならなかった。草庵暮らしの隠

他にもこの「騰騰任天眞」の自在さないし禅的清澄感は、次のような作品に表出している。

草の庵に　足さしのべて　お山田の　かはずの声を　聞かくしよしも　(1240)
詫びぬれぞ　心は澄めり　草の庵　その日その日を　送るばかりに　(417)
淡雪の　中に建てたる　三千大千世界（みちおほち）　またその中に　淡雪ぞ降る　(681)
むらぎもの　心樂しも　春の日に　鳥の群れつつ　遊ぶを見れば　(722)
濁る世を　澄めともよはず　わがなりに　澄まして見する　谷川の水　(413)
山かげの　岩間を伝ふ　苔水の　かすかに我は　すみわたるかも　(384)
岩が根に　したたる水を　命にて　今年の冬も　しのぎつるかも　(565)

自従一出家
任運消日子
昨日住青山
今朝遊城市
衲衣百余結
一鉢知幾載
倚錫吟清夜
舗蓆月裡睡
誰道不入数
伊余身即是(38)　(97)

我従住此中
不知幾箇時
困来伸足睡
健則著履之
従他世人讃

者でも、行脚・托鉢や法要の他に、親戚の冠婚葬祭に出ることもしばしばあった。里人から読経を頼まれることも多かった。

(38)　出家して以来、自分は大自然の動きに従って生きてきた。昨日は山に住み、今朝は村々を巡る。袈裟はボロボロ、鉢の子もずいぶん古ぼけた。星空の下を錫杖をついて吟じ歩き、月の下で蓆を敷いて寝る。人びとは奇人と言うが、これが自分だ。

任儞世人嗤
父母所生身
随縁須自怡(39)　（107、他に112，既述の114，286，413等）

しかしこうした調子の和歌は、それほど多くはない。漢詩にはかなりあるが、こういう心境の表出でないものも多い。良寛の作品の圧倒的な部分は、次のような雰囲気をもったものである。これらでも、任運自在が美の感覚、喜び・悲しみ・孤独等の意識を昇華させ歌に結晶化させたとは言える。しかしこれらに見られる喜び・悲しみ・孤独等自体は、悟境がもたらしたものではない。それは良寛の人としての感慨や思いが表出したものである。これらの調子の多数に及ぶ作品については、「背後に悟境の原理があって、それが規定しているはずだ」などという読み方をせず、かれの生のもう一つの表出として素直に読みとるべきだと思う：

月はよし　風は清けし　いざともに　おどり明かさむ　老いの名残に　（1214）
久方の　長閑き空に　酔ひ伏せば　夢も妙なり　花の木の下　（708）
さすたけの　君がすすむる　うま酒に　我酔ひにけり　そのうま酒に　（705）
さすたけの　君と語りて　うま酒に　あくまで酔へる　春ぞ楽しき　（709）
あすよりの　後のよすがは　いざ知らず　今日の一と日は　酔ひにけらしも　（1269）
何事も　みな昔とぞ　なりにける　花に涙を　注ぐけふかも　（1036、637）
奥手刈る　山田の小父は　いかならん　ひと日も雨の　降らぬ日はなし　（1167、1165）
小夜嵐　いたくな吹そ　さらでだに　柴の庵は　淋しき物を　（930）
さびしさに　草の庵を　出て見れば　稲葉押しなみ　秋風そ吹く　（816）
秋の野に　うらぶれをれば　小牡鹿の　妻よびたてて　来鳴きとよます　（541）

---

(39)　私がこの世に生まれてもう何年になるか。疲れたら足を伸ばして眠り、元気になれば履を履いて出かける。人びとが褒めようと嗤おうと、これが自分だ。仏縁に従い、楽しむだけだ

也与児童闘百草
闘去闘来転風流
日暮寥寥人帰後
一輪名月凌素秋　（59）

冬夜長兮冬夜長
冬夜悠々何時明
燈無焔兮炉無炭
只聞枕上夜雨声　（361）

これらは明らかに、悟者でなければ詠めない詩歌、作者の悟境を踏まえないと理解できない作品ではないだろう。これらの良寛の詩歌に溢れ出ている寂しさ、人びとと交わることの喜び、春を待つ切実感等は、たとえば西行の歌に似ると同時に、その切実さ・生々しさが西行におけるよりはるかに強い。しかしそれは、二人が同じ隠遁者であるが良寛には悟境があった、ということとは無関係であろう。二人を分けているのは、西行では（新古今集の歌人たちの傾向が幾分かは作用し）当時の審美感が意識的に表現されている面があるのに対し、良寛では――推敲・工夫が重ねられてはいても――感慨は身心の底から素直に湧き出ているということに求められるべきであろう。良寛は見性の人であった。しかしそれでも、見性後もなお消えない、生活苦・孤独・自己凝視・求道心・感じやすさ・喜びの感情等がかれに作用し、かなりの詩歌はそうした生を表出させている、と考えるべきであろう。(40)

しかも長谷川の前述のような議論の仕方をすると、他方では、道元やその他の多くの禅者は「成所作智」にまで達しなかったがゆえに情緒ある詩

(40)　中村宗一はその『良寛の偈と正法眼蔵』（誠信書房、1984）30頁以下において、解脱の芸術の特徴として、静寂、素朴、無相、天真、幽玄、枯高の六つを挙げている。上に見た良寛の諸作品にもこれらの性格が雰囲気としてあることは、ある程度認められる。しかしそれらで主題となっているのは、良寛の孤独、喜び、春を待つ心、春のうれしさなどであり、解脱の観点からだけで解釈することはできない。

を書くにはいたらなかった、との帰結になる[41]。だが、道元等の悟りが良寛のそれに比べ足りなかったとか、悟りのレヴェルには多様なものがあり、良寛以外の人が得たのは別の、低次の悟りだったとかとは考えにくい。むしろ、禅者たちはともに大悟した、しかし何かが作用してその後の経過の中で行態を相互に異ならしめた、と考える方が妥当と思われる[42]。では、そのちがいをもたらしたのは何か。それはやはり見性の前からあって見性後にも作用した、芸術的感性のちがい、感じやすさ・やさしさ・人恋しさ、芸術等に関わるバックグランド（経歴・家系）、社会的地位（組織に責任をもつか否か等）のちがい、さらには一事への徹底性の強弱、関心事のちがい等と考えられよう[43]。

---

(41)　ちなみに長谷川は、良寛の遊び・庶民との付き合い等についても、それらの根底には「十牛図」第十図入鄽垂手（にってんすいしゅ）の実践があると言う（前掲注12『良寛禅師の悟境と風光』第6章。長谷川は同書で、良寛の奇行や「破戒」をもかれの悟りから説明する）。だとすると、禅者は多いが良寛のような子供・大人との交わりは見られないのであるから、良寛はここでも特別の悟者だということになる。長谷川の言うような入鄽垂手を実践として追求しようとの意識（無意識）が、良寛にあったかも知れない。しかしこの点についても、子供・大人との交わりのどこまでがそれに関係するのか、の問題がある。しかも、良寛が布袋様そのものになったとするのは不自然であろうし、布袋様は良寛のようには弱さを詠わない。老年になるほど良寛には心の弱さが募るが（前掲注17・石田吉貞『良寛』334頁以下）、これも布袋様では説明がつかない。

(42)　長谷川自身は、前掲注36・『良寛禅師の真実相』166頁以降でこうした議論に反論し、良寛のように「三昧を得た人の場合、遊戯をしてもそれが弘法になる」、遊戯者の側面にもその佛徳力が自ずと現れている、とする。この論理でいけば、良寛の詩歌も、その大悟で得た才能の表出だということになる。

(43)　ただし、『傘松道詠集』の作品が道元のものであったとしたらではあるが、道元にも次のような叙情豊かな歌がある。

ながつきの　紅葉の上に　ゆきふりぬ　見る人たれか　ことの葉のなき
冬草も　見えぬゆきのゝ　しらさぎは　おのがすがたに　身をかくしけり
やまふかみ　みねにも尾にも　聲たてゝ　けふもくれぬと　日ぐらしのなく
我庵は　こしのしらやま　冬ごもり　凍もゆきも　くもかゝりけり
あづさ弓　はるのあらしに　さきぬらん　峯にも尾にも　はなにほひけり
をやみなく　ゆきはふりけり　たにの戸に　はる來にけりと　鶯のなく
やまのはの　ほのめくよひの　月影に　ひかりもうすく　とぶほたるかな

実際、長谷川は、以前に書いた『良寛の思想と精神風土』（早稲田大学出版部、1974）では、良寛と道元との和歌を比較して、「自然をうたう時の良寛には、僧侶らしさや隠者らしさは微塵もない。多感な詩人的感情が働いているのみであり、その心情を率直に吐露しているのである」とし（同書152頁）、その原因を「「自由人の面影」と「多彩な詩人的感覚」の強さ（同書71頁）とに求めていた。そしてこの本での長谷川は、悟りについて「工夫弁道するには、各々の気質と批評精神によらねばなしえぬ」とし、その結果「人［は］それぞれの悟りに至りうる」としていた（同書177頁）。気質や姿勢が、悟境態様の差をもたらすというのである。この上に立って長谷川は、道元が詩歌で厳格に心情表出を避けようとした理由、その「厳しく張りつめた規制と行持の世界」（同書71頁）への徹底の背景には、かれの出自、父親が出世のために次々と高貴な女性たちを、性的関係を結んで利用し続けたその業の深さへの嫌悪があったとする（同書178頁以下）[(44)]。

人びとの行動をその思想（良寛についてはその悟りの風光）から説明したくなるのは理解できるが、しかし思想外的要素がもつ意味も、無視できないのである。

なお、この点に関してはまた、身心脱落こそが、各人がもともともっていた体質を素直に――規矩に従いつつ――前面に押し出すことをもたらし

また見んと　おもひし時の　あきだにも　今宵のつきに　ねられやはする
（以上、鷲尾順敬・大久保道舟校註『傘松道詠集』）

道元の母方の祖父は前摂政関白の藤原基房であり、父・通親の家系とともに和歌に精通していた。これが、道元の芸術的感性の豊かさをもたらした。

では道元はなぜ、芸術を遠ざけようとしたか。この点について西野妙子はその『良寛、その心性』（国文社、1981）86頁以下で、「道元は己れの才を知りながらすべて小さきものを捨てて仏祖道を歩んだ」と説いている。曹洞宗の開祖として組織を担う立場からそれ以外のものを捨てた道元と、ひとり自由に生きつつ仏の道を実践する良寛とでは、芸術への傾斜に差が出ることとなったのだろう。

(44)　長谷川は、道元は、「道詠」にこだわったため、「詩歌には心の自由な流れがない。その結果、その詩歌はあまり上等とは言えない」と述べている。前掲注12・長谷川洋三『良寛禅師の悟境と風光』206頁。

たという面も、併せて考えておくべきだと思われる。どう坐るべきか、どういう結果を得るべきかなどにこだわらず、ただ坐ること、そのことに身をまかせることが只管打坐である。そしてその積み上げによって、とらわれなくなり万法に証せられて生きることが可能となる。そして、その場その場の機（新たな情況・巡って来た季節・出会う人等）に、抗わず自在に自分を合わせ、軽やかに徹することになる。また、自分の地を自然に押し出すことになる[45]。この結果、もともと人なつっこいやさしい者は、そうした地が前面に出、厳しい人は、その厳しさが冴えてくる[46]。先に引用した「生涯懶立身　騰騰任天眞」（114）の詩は、良寛が不自然に無理することを好まなかった（生涯懶立身）と同時に、それが悟境でもあった（騰騰任天眞）ことを物語っている。良寛において悠然とした自在さは、修行を通じて身につけた身心脱落によって昇華され、かれの筆跡や和歌が示しているような、強靱だが、澄み切った、こだわりのない自然体をもたらした。このことにより、かれは、本来の自分の文人気質を存分に発揮させ、また世間の常識をも軽やかに越えた自然な、心やさしい行態で子供や大人と交わった[47]。こうしたかたちで良寛は、湧き上がってきた情趣や思惟を素直に詠い描き、また人や動物に温かい心で接した、という面は確かにある。

この点では悟境が基底において働いているとは言える。しかしそれは、悟境が悟境以前のもの（生得の個性）を発揮させたということであって、達した特殊な悟境が作品を生み性格付けているということではない。

（45）　前掲注17・石田吉貞『良寛』292頁以下。石田の著書には本稿を書き上げる1週間前に出会ったが、もっとも共振した良寛研究書であった。

（46）　加えて、見性後も共同生活を続け、組織に属しそれを統率し、それゆえ紀律を押し出しつつ生きる道元と、山中の隠遁生活にあって孤独を噛みしめつつ自由に生きる良寛とでは当然、峻厳さ、自然美への感覚、自分への眼、人びととの交際の中身等に差が出てくる。前掲注17・石田吉貞『良寛』306頁以下。注43参照。

（47）　前掲注27・竹村牧男『良寛の詩と道元禅』121頁以下。「良寛は種々の葛藤を載断し、おもうこともいとうこともない造作なき世界に常に遊戯しつつあった」151頁、「良寛の、力をいれずこころをもついやさない涼しい生涯には、無限に懐かしいものがある。」161頁、と竹村は言う。

逆に、禅者良寛を非禅者の道者、たとえば聖フランチェスコと比較するならば、どうだろうか。二人は確かに、驚くべき近似性を次の点でもっている。すなわち、①若いときはともに放蕩に走ったが、しかしやがて突如決意し、父母・家族を捨てて乞食による孤独で貧しい求道生活に入った。そしてその中で、回心体験を得た。②抗うことがなく、風雨も寒さも暴力も空腹もその身に受け容れた。③貧者・病人に優しい手を差し伸べた。④花を愛し、太陽ないし月を愛した。フランチェスコは小鳥に説法し、狼を諭した。良寛は、雀や犬に慕われた[48]。⑤自然の美しさを愛し賛美した。二人はともに、情感の人であったし、そうした自然に神の創造ないし仏性を看て、その美しさに喜びを感じ、またそこにものごとの真を感得したのであった。⑥腐敗した宗教界の現状に対し批判の姿勢をもっていたが、他方では無抵抗の姿勢で無理解な人びとと接した。⑦聖フランチェスコのそばには美貌の聖クララがおり、晩年の良寛のそばには美貌の貞心尼がいた。

もっとも二人には、相互に相異なる点も、次のようにある。①青年期において、聖フランチェスコは騎士にあこがれ、戦役に加わった。良寛は、学業に励んだ。②聖フランチェスコは、出家後一貫して常に仲間と一緒に行動したのに対し、良寛は、基本的には孤独であった[49]。③良寛は文芸を愛し、また酒・たばこ・うまいものをも愛した。聖フランチェスコには、良寛に見られたような生の肯定、文芸への傾倒、人びとに溶け込んで遊ぶ朗らかさは見られない。

当然のことながら、聖フランチェスコは上記のような相似た点を禅的悟りの結果として得たのではない。だとしたらそのような近似の原因は――禅の思想や見性の力というよりも――二人の性格がもともと（＝それぞれの若いときから、ないし潜在的に）似ていたことに主要な原因を求めるほか

（48）　前掲注13・相馬御風『一茶と良寛と芭蕉』140頁以下。

（49）　聖フランチェスコについては、拙著『法思想史講義』上（東京大学出版会、2007）；石上イアゴルニッツァー美智子『良寛と聖フランチェスコ――菩薩道と十字架の道　仏教とキリスト教の関係について』（考古堂書店、1998）。

ない。もっとも聖フランチェスコの場合、その青年期に（対ペルージャ戦での虜囚体験とその後の大病後に）突然の大きな回心があった。この回心後、それまでの享楽的で野心家であったかれは、人が変わってしまったという。しかし、その変化はおそらく表層におけるものであったのだろう。その前期、享楽的で野心家であった時期においても、かれは根底においては後の時期の聖フランチェスコの性向をもっていた（それゆえ、前期には自分の行動とあるべき自分の予感との落差に疑問をもちつつ生きており、それがやがて回心の力となって働いた）、と考えるべきであろう(50)。

次の点も、問題になる。人は、一回の悟り体験――それを得るには数年、数十年の修行を要する大変なことなのだが――によってその人格を完全に改造されるといったものではないだろう。そもそも禅の世界では、一回の悟り体験によって修行は終わるのではなく、その後には悟後の修行、聖胎長養が必要だとされる。このことは、一回の悟りで人が一つの型へとまったく変わったとするものではないことを意味している。このように悟りは生涯を掛けて追求するものであるとしたら、人生途中で悟りによって禅者が相互に同じになるということは、ありえない。

聖胎長養を重視した一人が、白隠である。かれは大悟し正受の印可を受けた後、何度もの見性体験を重ねることとなった。かれは晩年、その人生を振り返って「大悟十八度、小悟数知らず」と語ったと言われる。かれならずとも、禅の修行者はその生涯において大悟を１、２回、小悟を数回、得るということだそうである。

白隠はまた、大悟の後、「禅病」（一種の精神疾患、ノイローゼ）にかかっている。この事実は――修行の激しさが精神面にもたらすマイナスととも

(50)　仏教とキリスト教と宗教は異なっていても、最高水準の回心は同じ方向に人を改造する、という見解もある。石上が前掲注49『良寛と聖フランチェスコ』で良寛と聖フランチェスコの共通性を論じる際に前提にしたのもこれである。しかし、二人以外にもすぐれた回心者はいたが、かれらすべてが同じ性向の人となったというものではない以上、この回心論は正しくないだろう。

に――一回の悟り体験で人が完全に出来上がるものでないことを如実に示している。悟り体験は、その人の心身の一部を変える、とくに任運自在の精神を獲得させるとしても、それが身心全部を規定し尽くすといったものではないであろう。最初の悟りによっても変わらなかった自分がまだ残っている。それゆえ自分の中に不安定さが自覚され、それに対する焦りも嵩じていく。だからこそ白隠のような人においても、さらなる苦闘が始まり、時には修行が精神の病をもたらすということだ。

良寛もまた、このような関係において、自分の中にまだ克服されないものが強く働いているとの、未完成の意識をその生活基盤にしつつ生涯を送った。かれが円通寺時代、あるいはその後の時期（とくに国上山草庵期）において大悟したのは事実だとしても、そこでかれが禅者として確立したとして、その後の作品を悟境に還元させて描くのは、かれの自覚にも、事実にも反するだろう（そもそもかれが国上山で草庵暮らしを始めたのは、悟りの後に辺鄙の地に籠って修行する聖胎長養の実践のようにも思われる）。

良寛は、一方では、見性したところに出てくる生き方を基盤として新たに生きた。五合庵の良寛は、確かに、

> 峯の雲　谷間の霞　立ちさりて　春日に向ふ　心地こそすれ　(476)
> 捨てし身を　いかにと問はば　久方の　雨降らば降れ　風吹かば吹け　(493)

と澄んだ心を晴れ晴れと詠いえた境地にあった（前述。322-323頁の詩歌をも参照）。しかし、他方では、自分はなお修行が足りないと意識していた。多くの詩においてかれは、道が遠いうえに自分の性格である自然さや天衣無縫性の享楽人性ゆえに、完成は難しいと詠っている。たとば、同じ、五合庵の良寛が、

> 法の道、まことは見えで　昨日の日も　今日も空しく　暮らしつるかな　(473)

と、日々努力はするものの確信が得られていないと、自信のなさを深く嘆

息しているのである。かれはまた、

あしびきの　山田の案山子　汝さへも　穂拾ふ鳥を　守るてふものを　（345）

とも詠んでもいる。この歌は、道元の

守るとも　おもはずながら　小やまだの　いたづらならぬ　かゞしなりけり
（『傘松道詠』）

を踏まえていると言われるが、道元の歌が悟った自分への確信に満ち、その意識で案山子を上から目線で見ているのに対し、良寛は案山子にも劣る無用者の自分を見つめ嘆息している。ここには大悟の自信は、感じられない。

古に　ありけん人も　我ごとや　ものの悲しき　世を思ふとし　（487）

も、悟りとは異質の、心の乱れの日々を詠った歌である。

乙子神社期にも、

闇路より　闇路にかよふ　我なれば　月の名をさへ　聞き分かぬなり　（885）
いかにして　誠の道に　かなひなむ　千歳のうちに　ひと日なりとも[51]　（933）
夢の世に　亦夢結ぶ　旅の宿　寝覚淋しふ　物や思わる　（937）
むらぎもの　心さへにぞ　失せにける　夜昼いわず　風の吹ければ　（1008）

などとある。これらも、悟りの清澄さとは結びつかない、気持ちの沈み、自分への失望、心の動揺の歌である。晩年に近づくにつれ、そうした意識が次第に強まってもいる。

（51）　西野妙子は、前掲注43『良寛、その心性』204頁以下で、この和歌をめぐって、良寛が「苦しんでいる有様がよくわかる」とした上で、次のように述べている。「しかしこれで良寛が悟境にいなかったとするのは間違っている。悟境に、一瞬の迷いもないというのは、絵空事の餅のようなもの。悟得了するといっても、それは苦悩もさらなる修行も、共に受了する事だと思いたい。淋しさも愛も和も、厳粛もすべて含めての悟境である。」

良寛の詩でもっとも強い虚しさの意識を漂わせているのは、次の詩である。

従我来此地
不記将来時
荒蕪無人掃
鉢嚢即塵委
孤燈照空壁
夜雨灑開扉
万事共已矣
吁嗟又何期　（423）

自分は、この土地に来てから、何をしてきたのか。庭は手入れもなく荒れ果て、托鉢の道具には塵が積もっている。一つだけの灯りが空っぽの部屋を映し出し、激しい雨が庵に叩き付ける。もうすべてが終わってしまった。自分に今さら何ができるのだ、と良寛はすっかり落ち込んでいる。

良寛はさらに、その強い執着の心をも何かにつけて示している。かれは、友人との交歓・子供との遊び・村人たちとの盆踊りなど交わりを楽しみ、自然の美しさをそれ自体として愛した人であって、それは壮年期以後ますます強くなった。春に対し、若菜摘み・花見に対し、貞心尼に対し、見たさ会いたさに心せく気持ちを、良寛は詠う：

我が宿の　軒端に春の　立ちしより　心は野べに　ありにけるかも　（1189）
何となく　心さやぎて　寝ねられず　明日は春の　初めと思へば　（577）
賤が家の　垣根に春の　立ちしより　若菜摘まむと　しめぬ日はなし　（563）
いざ子供　山べに行かむ 桜見に　明日とも言はば　散りもこそすれ　（698）
君や忘る　道や隠るる　このごろは　待てど暮らせど　をとづれのなき（1076）
あづさゆみ　春になりなば　草の庵を　とく出て来ませ　逢ひたきものを（1182）

悟りは、かれのこのような執着を消し去ることはできなかったし、消し去る必要もなかった。世に交わり自然に接するのは、悟りの人として「同事の行」の実行であったという面はあるかも知れない。しかしかれはやはり、禅者然ととり澄ましているには、あまりにもこの世の諸物への執着を強くもっていた。

同年代の狂歌師・朱楽菅江（あけらかんこう）が、

執着の　心や娑婆に　のこるらん　よし野の桜　さらしなの月

と辞世の歌を陽気に詠んだのと同様、乙子神社期以降の良寛は

亡き跡の　記念ともがな　春は華　夏如帰鳥　秋は艸葉　(1158)
風は清し　月はさやけし　いざともに　おどり明かさむ　老いの名残りに　(1214)

とその晩年に詠んだ。かれはその最後まで、自然美・人びとへの執着の心をもち続けたのである。

7　結び

良寛の人格・行態には、相互に対立的と見える多様な要素が共存している。ここでまとめ挙げると、次のようになる。

①かれは、あえて人里を離れた山中ないし神社の深い杜内で孤独な暮らしの日々を送り、自分にはこれこそが性に合うのだと見ていたが、その反面で村に出て人びとと交わり、訪問客が来るのを希求し、また旧友、地方・中央の文人・名士との深い親交を楽しんだ。孤独に苦しんだがゆえに交わりを求めた、あるいは孤独と交わりの双方が好きだったと言えるが、他方では、世捨て人として孤独であることにこだわる思考ではなかったとも言える。

②山の上で世捨て人として暮らしたが、麓の村々を襲う嵐や地震、飢饉

や打ち壊し、仏教界の荒廃、時代の激動など人びとの生活に心を寄せた。

③冬の寒さに凍えつつも独り座禅をする日々を重ねるような自分に厳しく自己紀律で生きつつも、その反面で庶民や子供に対してやさしく、季節の変化に敏感な、自然に溶け込むような細やかな詩情を湛えた作品を残した。修行面では厳格だったが、あふれ出る詩情や悲哀感なども示した。曹洞禅の修行の実践と、人間味、詩情、雑念等が共存していた。

④厳しい自己追及、自虐に至るまでの自己直視の人であったが、その反面、型破りの天衣無縫ぶりをも示した。一事への集中が他において弛緩・無関心をもたらしたと言えるが、まるでちがう二側面が共存していたとも言える。

⑤乞食に頼りつつ草庵での極貧生活を送り続けたが、その反面で草庵を訪れる裕福な親友たちが運んでくれる、ないし各村の裕福な知人宅でかれらが出してくれる、酒肴やご馳走、お菓子をこよなく愛した。飢えていたがゆえに食べる楽しみを大切にしたとも言えるが、隠者の暮らしに徹しきろうとするような肩肘張った生き方はしなかったとも言える。

⑥すべてを自然の流れに任せる「騰騰任天眞」を体現し、それを生きたが、他方では突如出奔するとか、突如越後に帰郷して定住するとか、故郷に帰って住み始めた際、実家には頑として近づかなかった[52]とかと、こうと決めればそれを断行する強い意志の人でもあった。またそうした悟境にありながら、惚れ込んだ師（道元、国仙、大而宗龍[53]等）に激しい傾注を示すと

（52）　前掲注28・荒井魏『良寛の四季』103頁以下。

（53）　一説によれば、良寛は1785年、28際の時、亡くなった母の 3 回忌のため帰郷し、その機会に現新潟県新発田市の紫雲寺村観音院の住職であった宗龍（当時68歳）の（最後の）第33回目安居（ 5 月）に参加した。良寛がのちに貞心尼に語ったところによれば、かれはこれを契機に宗龍の人徳に惚れ込み、「どうぞ一度相見いたしたく思」うようになった。良寛は1787年30歳の時、単独で行脚を始め、その機会に観音院でも修行し宗龍に面会しようとした。しかし宗龍はこの時にはすでに隠居し、別所に籠もり面会謝絶となっていたため、良寛は意を決してある夜、高塀を越えその別所に侵入し、置き手紙を手水鉢の上に置いた。それを読んだ宗龍は翌日に良寛を招き、良寛に以後「勝手次第」での面会を許した。

か、美貌の貞心尼に深く心を開くとかというように、特定のことには、覚りを開いた後にも強い執着心を示しもした。

これらそれぞれ、ことの一面とその反面が不思議な共存を見せている。しかしこうしたことは、かれにとって深刻な矛盾、アンビバレンス、自己分裂をもたらすものではけっしてなかった。かれの動き方の根底には、それぞれの局面に徹する姿勢、夢中になる傾向、即物性、まっすぐな態度が働いていたのであった。そしてものごとへの集中が、局面局面でかれの書いたものに素直に反映されたのだ。かれはこうしたかたちで、多様な思いを重ねつつ軽やかに生きた。そしてそれらを、根底においては、鍛え上げられた只管打坐・任運自在の身心が支えていた。

かれはこの点で、近代人か前近代人かの問題を超えた、独特の自由人としてあったのである。